

---

# オープンドシール

鳴鐘新都

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

オープンドシール

### 【Nコード】

N5764Z

### 【作者名】

鳴鐘新都

### 【あらすじ】

善き神と悪しき神が空の星達の支配権を巡って果てしない争いを繰り広げたのも今では昔のこと。

争いの末に善き神は冷たい場所に悪しき神を封じ込め、その上に蓋をするように

この世界を創ったとされている。

善き神の封印は悪しき神から魔法の力を吸い出し世界を豊かにするはずだったが

悪しき神の置き土産である怪物が魔力湧く泉である【冷孔】の元に

居座り続けていた……

そんな御伽噺のような伝承の残る異世界・パラダイムがあることなど知らず

現代の日本から落ちてきた熱血高校生桜田雪平の人生は一変する。彼を待つのは戦いと旅の日々、そして仲間との出会い。

雪平は銀髪紫眼の美形青年剣士ヴァイスに出会い、故郷への帰還への鍵が

この世界の英雄三人が嘗て解放した残り7つの大冷孔に有ると知る。雪平はヴァイスに同行、師事を仰いで魔物と怪物を狩るため

日本で習った剣を捨て巨大な大剣を振るう技を修行によって身につける事を決める。

些細な切欠で新たな旅の道連れの加入。

翼持つ神官少女ミルクも旅に同行することに決まった。

雪平は怪物を退治し冷穴を解放する職バスターになる事に成功する。これはあくまで通過点で雪平は今だ強者には程遠く導かれるべき存在。

日本で得た知識も目指すべき道で今だ活躍する兆候を見せない。

頼るべきはチートなどではなく己の心、鋼の魂の冒険活劇。

彼の故郷はまだ遠い。

## プロローグ（前書き）

異世界トリップものです。

暇つぶしくらいの軽い気持ちで読んでいただけると幸いです。

## プロローグ

「……いてえ」

学校の帰りに突然目の前が真っ暗になったかと思うと次の瞬間には背中に物凄い衝撃が走った。

あたりは妙につんとする黴と木の匂いが鼻を衝く。

「おい、お前大丈夫か？」

声をかけられた。よく通る男の声だ。

声の主を探すとそこには妙な男が居た。

年のころは二十代だろうか？

顔立ちその物は美形、だが格好と眼と髪が奇妙だ。

長めの銀髪に紫の眼。

それになにかのRPGや漫画の登場人物のような黒の鎧に腰に帯びた剣。

「くっそ……これが大丈夫に見えるかよ……」

「立てるか？手を貸すぞ」

謎のコスプレ野郎に腕を貸されて立ち上がる。

「ありがとう、助かったぜ……でも一体全体何がどうなって……」

体中に木片やコケやら何やらがついているのに気づき、叩き落とす。

「どうやらお前はあそこから落ちてきたようだぞ」

落ち着き払った態度の男の指差す方向を眺めると

なんと言うか余り受け入れたくない光景が見えた。

俺の住んでいた日本の街の何処かなどいう可能性は今この瞬間消え失せた。

青い空、茂る森の木々の中に立っているのは俺が背中から落ちたらしき建物。

打ち捨てられた礼拝堂や教会のような感じで、屋根の一部が凹んでいる。

……明らかに俺の落下の痕跡だろう。

「……マジか……冗談きついぜ……ここ何処だよ……」

背中から落ちた落下の傷の痛みすら忘れるほどのショックだ。

これがいわゆる神隠しってやつなのか……

男らしくないが俺は頭を抱えて情けなく呻くことしか出来なかった。

「……お前運が良いな」

突き放したような響きのあるよく通る声で謎のコスプレ野郎が呟いたので切れそうになった。

「どこがだよ！」

「お前を見つけたのが俺じゃなく野盗や怪物の類ならお前は死んでる」

こいつの冷徹とも言える斬って捨てるような言動。

事実と現実だけを直視した言い方に、俺は確かな真実の匂いを感じて背筋が寒くなった。

「……いるの？野盗とか怪物とか聞き捨てならない言葉がきこえたんすけど」

コスプレ剣士は何言ってるんだこの阿呆は、というような態度で髪をかき上げながら答えた。

「……居るに決まっているだろう。お前は何処の平和な国から来たんだ？」

ああ……いつまでもお前では具合が悪いな。名前は？」

さくらだ ゆきひろ

「桜田雪平。あんたの名前は？」

「耳慣れぬ響きだな。俺はヴァイス」

端的にそう言ったコスプレ野郎……いや、もうコスプレ野郎と思うのはよそう。

一応落ち着いてヴァイスを観察する余裕が出てきた。

鎧についた細かい傷に小さな汚れ、身に帯びた剣や鎧はどう見ても使い込まれている。

コスプレじゃなく実用品として使わなければこうはならないだろう。それに身のこなしもそうだ。何かの武術をやっているように思える。俺も少しだけ心得があるからなおさら良く分かる。

ドッキリでもコスプレでもなくどうやらここは本当に訳の分からな  
い異世界らしい。

「……行く当ても無え、金もねえ、帰れるかどうかもわからねえ。  
何でこうなった。俺の未来も明日も全く見えねえ」

打ちひしがれて地面に手をつきがつくりと気落ちする俺に  
ヴァイスが深いため息をついた後声をかける。

「……見捨てるのは簡単だが、それは余りにも安易すぎだな。  
このままでは確実に野垂れ死ぬ……それも面白くない。」

雪平、なんとかしてやるからついてこい」  
やべえ、この人かっけえ……

人情が身にしみる……涙出てきそうだ……

コスプレ野郎なんて思ってたすいませんでした。

「すいませんよろしくお願いしますヴァイスさん！」

「ヴァイスでいい。さんは要らん。」

ああ、生活が安定してきたら費用は請求するからな」  
しっかりしてるなあ……

いや、それでも十分ありがたいけど。

## プロローグ（後書き）

チート無し、転生無し。

これでも異世界トリップ難易度：ドM 難易度：ルナティックには遠い。

主人公には「有情」だと思っていたきたい。

チートも無い。転生による強くてニューゲームもない。言葉も通じない、誰かが助けにも現れないのが真のリアル異世界トリップだ。



## 第一話・郷愁、そして示された目的

俺がこの謎のファンタジーな世界に流れ着いてもう何キロ歩いただらうか？

正確なところは少しもわからない。

整地されていない森を歩くことなど初めての経験で

何度も足をとられて躓き、木々から生える小枝に引っかかれながら歩き……

それに足元に生える草の棘に皮膚を刺された。

体は鍛えているつもりだったが慣れない事が重なりすぎて

足は疲労でガクガクだ。

ああ、ベッドで眠りたい……

夕方になった頃森を抜けて少し開けた丘のところでヴァイスが口を開いた。

「近くに水場もある。今日は此处で野営するぞ」

「ういゝす……」

ヴァイスは俺に小さなナイフを差し出してこう命じた。

「このあたりの草を刈って寝る場所を作るんだ。」

小さな石とかも取り除け」

それからヴァイスと俺は二人で草を刈って石を取り除く作業に没頭した。

なんとかその作業を終えて座り込んでいると

ヴァイスは荷物から文字が刻まれた杭のようなものを取り出し

地面に幾つも打ち込んでいく。ちょうど今しがた作った空き地を囲うようにだ。

「なんすかそれ？」

「虫除けと怪物避け、警戒の式が刻まれた結界を作ってるんだ」  
端的にヴァイスはそう説明した。

「……そっすか」

やっぱり魔法もあるんだな。

原理を尋ねたり効力に懐疑を示す余裕は今の俺には無い。

まったく……ファンタジー過ぎて困るぜ……

それから二人で設営を完了させ

ヴァイスの煎れてくれたむやみやたらと苦いお茶のようなものを飲んで

体を温めながら火を囲むことでようやく俺は人心地つけた。

「あゝ帰りてえなあ……」

我ながら情けないと思いつつしみじみと俺は呟いた。

単調で機械的な学園生活の中で馬鹿なことをする。

日本で高校生をやった時はこれほどつまらないものは無いと思っていたのだったが、いざ全く取っ掛かりの無い世界に放り出されて

初めてありがたみが身にしてみた。

平和も退屈も結構なことじゃないか。

コンクリートで海も川も大地も固められて鉛色の陰鬱な空。

薄汚れていても、やはり故郷は故郷で楽しい事や美しいことも確かにあそこには有ったのだ。

だが今俺の眼に映るのは自然で一杯のクソッタレファンタジーの夜の闇ばかり。

文明の光などありはしない。

しかも怪物や追いはぎなどという現実味の無いものが跋扈する危険な闇だ。

「帰りたい、か……そうだな……故郷はいいものだ

それがどんな厳しい所であろうとも……」

ヴァイスから意外な一言が聞けた。

自分でも正直情けない事を言ったと思うし  
てつきり何か斬って捨てるようなことを言われると思ったのに予想外だ。

「意外だな……俺、てつきり甘えるなみたいなことを言われるかと

思った」

「お前は迷って此処にきたのだろう？誰だっ て心細いはずだ。それに俺だって故郷に帰る事を 目指しているんだ。

七つの【大冷孔】を解放し、遙か遠い故郷に帰る」

物憂げにヴァイスはそう呟いた。

悔しいが……いやしかし絵になるなこの男。

イケメンすぎるだろ。

ちよつと現実離れた美形だ。

その物憂げな表情だけで女の子が放つて置かないだろう。

向こうの世界ならそのままアイドルや俳優でもやっ ているだろう と思う。

それはそうと俺は思つた疑問を口にする。

「大冷孔ってなんだ？」

ヴァイスが本当に驚いたような表情を形作る

「本当に知らないのか……？お前は何処から来たんだ？」

「日本だよ！にっぽん！ああ、こつちじゃ通じないかもしれないな

……

えーと、チキユウの日本！テラ！アース！ガイア！」

俺は思いつくがままにそれっぽい世界の名称を並べ立ててみた。

「……本気で言っているのか？」

ヴァイスはいぶかしげに眉をひそめた。

「え、なんか俺おかしい事言つた？」

「地球も日本とやらも知らんがまさかガイアとは……」

「え。知ってるの！？」

「ガイアは彼岸、あの世だ。天上に有る死後の世界……魂の行く場 所とされている」

「あの世……マジかよ……こつちの世界……あの世……

一体全体……此処はどうなってるんだ……」

「信じないわけではないが何処から来たかは吹いて回らないほうが お前のためだ」

「分かったよヴァイス……頭のやばい奴扱いされたくないもんな」

「聞かれたら記憶喪失とでもしておけ」

「おう……で、大冷孔って何なんだ？」

「それを説明するにはこの世界の神話から始めなければならぬな」

そういつてヴァイスは語り始めた。

善き神と悪しき神が空の星達の支配権を巡って果てしない争いを繰り広げたのも今では昔のこと。

争いの末に善き神は冷たい場所に悪しき神を封じ込め、その上に蓋をするように

この世界を創ったとされている。

善き神の封印は悪しき神から魔法の力を吸い出し世界を豊かにするはずだったが

悪しき神の置き土産である怪物が魔力湧く泉である【冷孔】の元に居座り続けていた……

「へー。なんか、聞いたことのあるような無いような……」

空の星たちの支配権？何か引つかかるんだよなあ。

似たような話をどつかで聞いたような……

「小さな規模の冷孔は山ほどあって、その傍に村があったりする。

地上にはびこる怪物退治や冷孔に居座る大物の怪物を退治する職業

【バスター】は今も引く手数多だな。

功績によつては栄達、栄耀の道が開けるし貴族になれることもある」

「なんとなくニュアンスで冷孔がこの世界で重要視されてるのは分かったけど何故なんだ？」

そして何で怪物が居座ってるのは分かったけど……

怪物はそこで何してるんだ？どうして怪物をどけなきゃならない？」

「あー。それも説明しないといけないか……いいか？」

冷孔を開放する利点の方から説明するとだな……

第一に冷孔の開いているところと閉じている所では土地の実りの豊

かさが全く違うんだ。

それに冷孔から出た魔力だけじゃなく冷気は食料の保存に使える。

第二に魔法で出来ることが増える。

冷孔のバックアップ有り無しではその強さは比較にならなくなる。煮炊きする火。安全な水も魔法で出せる。魔法で作られる様々な便利な魔道具も作れる……

何より大きいのは魔物、怪物避けの結界を冷孔の魔力で展開できることだ。

冷孔の開いていない土地でも魔法は使えるが生命力精神力を直に削ることになる」

「あー。なるほどなあ……食い物と技術と防衛か……大事だよな」

子供でも知ってることなんだがなあ、とヴァイスが肩をすくめ付け加えたのがちよつと辛い

ほんとに、迷い込んできただけの一般ピープル、健康優良日本男児なんだよおれは。

「他にも魔物をどけなきゃならない理由はな

悪神、邪神の使いとされている魔物や怪物は基本的に人を殺し、喰

う」

「うわあ……」

「冷孔に居座る大物は魔力を吸って生きるからその場から殆ど動かないが……」

「その大物の怪物に魔力を食われてその冷孔は使い物にならない、と」

「その通り。冷孔に居座ってる大物は地上をうろつく怪物や魔物とは比較にならんくらい強い。

保有している魔力の桁が違うからな……

肉体も強化されてるし中には強力な魔法を使う知能の高い奴もいる」

「なるほど、じゃ、大冷孔ってのはその凄い奴か」

「ああ、現在見つかつてる大冷孔は全部で十、その内解放済みは三つ……」

現在、世界最大の三つの都、帝都、王都、神都になっている」

「なんか凄いな」

「一個でも解放すれば最大級の名声と富が得られるだろうな。

歴史上、英雄と勇者と初代教皇以外、大冷孔の解放には成功していない……

さつき、一般的な神話に対しては話したろ？」

「善き神様が、とかってやつだろ？」

「冷孔の解放は民を富ませ怪物の脅威から人を護るだけではなく神意にも沿うと

一般的には考えられている。冷孔を解放すればするほど

悪しき神の力は弱まり善き神が強くなる……

つまりは宗教上の権威も非常に大きいんだ」

「なんか色々ともめそうだなあ」

「そう、もめる。具体的には冷孔を開放する命知らずは常に歓迎されるが……

開いた後の利権がなあ……」

「まためんどくさい話だなあ……細かいことはあんまり考えたくないぜ。

とりあえず冷孔を開放すれば皆にとって良いんだろ？」

「民は富むな。それがきちつと分配されるかどうかは別問題だが」

「だったらそれでいいんじゃないの？」

「……それにな、もし雪平が本当に帰りたい

いや、生身のままガイアに行きたいのなら……

大冷孔を開くことでしか可能性はないと思う」

「どうということだ!？」

「大冷孔の魔力を利用してガイアまでの空間を繋げる魔法を使うんだ。

冷孔の魔力を利用して長距離転移をする術式は存在するが

ガイアまでとなるとまるで未知の領域、雲を掴むような話だ」

「未知だろうが何だろうが可能性があるならとにかくやるっきゃね

「よなあ……」

「そういう結論になるのか？」

「はい？」

なにいつてんだ。その結論しかないだろ。

「俺が送ってやるから危険を冒さず街で暮らすという手もある」

「やだよ。チャレンジしないうちに諦めて安易な道に走るのなんて俺の世界そんな奴らばかりだぜ。そんなの俺はもうごめんだ。

危険は嫌だけどさ、どうせ命は軽いんだ。

やつても居ないのに逃げるのは死ぬより嫌だ」

拳を握り締め自分に言い聞かせるように俺は吠えた。

「夢はでつかくハートは熱く！能力や見た目や持つてる金が価値の全てじゃねーだろ！

男の生きる道に本当に必要で頼れるのは

己の燃え滾る鋼の魂！元の世界じゃ理解も賛同もされないし

古臭く錆びちまったが……俺はこういう生き様が好きなんだよ！」

俺は俺の生き方が元の世界じゃ時代遅れなんじゃないかなーとはうすうす気が付いてた。

でも時代遅れだろうが何だろうが俺は好きなものは好きという。

それが本当の個性ってやつなんじゃねえの？

「……くっ、くくくっ、はーっはっはっはっはっ！こいつは良い

！！痛快で傑作だ！！

俺みたいな大馬鹿が他にも居たとはな！！」

「俺にはヴァイスが馬鹿には見えないぜ。少なくとも俺より賢そうだ」

「いやいや雪平、俺の目的である七つの大冷孔の解放なんて世間的な価値観に照らし合わせれば

十分大馬鹿の戯言、鼻で笑われる子供の夢想のようなものなんだよ。一つで英雄や勇者に成れる大事なんだ。七つ全部は……」

「こまけえことはいいいんだよ！世間がなんと言おうがやるつもりなんだろ？」

やって故郷に帰るんだろ？」

「無論だ」

「じゃあそれでいいじゃねーか」

「……片や、七つの大冷孔を開放すると決めた大馬鹿と

片やガイアを指すと誓った大馬鹿か……子供の空想だが悪くない、悪くないぞ……」

まずは雪平には怪物と魔物を狩り冷孔を開放する【バスター】になつてもらわないとな！」



## 第一話・郷愁、そして示された目的（後書き）

主人公、熱血馬鹿。

そして世界観の説明を少しさせていただきました。

## 第二話・最初の街

夜明け近く、まだ眠い眼を擦りながら

ガツチガチに石の様に固く、黒ずんだパンと

塩気のきつ過ぎる干し肉の朝食を俺は齧った。

分けてもらって悪いとは思いつつ俺は切り出した。

「なあ、飯って何時もこんな感じなのか？」

ヴァイスは少し顔を顰めながらこう答えた。

「……俺は料理は出来んのだ。」

自分でやってみたことも有るが古びた匂う革靴みたいなことになった。

明けても暮れても戦いばかりやってたからな……

それに旅の間の保存食は何処へ行ってもこんな感じだ。

それでも食えるだけマシといった所だな。

食料自体がこの世界じゃ貴重なんだ」

ヴァイスさんは出来そうなイメージがあったけどなあ。

冷静沈着で銀髪紫眼の二枚目イケメン剣士ってだけの先入観で

判断するのはやっぱりよくないな。

うつむ、それにしたってこれは酷い。

やっぱり日本とファンタジー世界じゃ違うんだな……

国によって大分食文化や料理の腕前は違うって聞いたことあるけど。

日本の食事って美味かったんだな。

よし、決めた。

現状に不満を言うのは誰だって出来る。

安易な道に流されるのは嫌だ。

自分から建設的な事を始めなければ何一つ変わらない。

「なるほどなあ……一回でいいから今度作るときは俺に任せて貰ってもいいですか？」

「心得があるのか？」

ヴァイスが少しだけ嬉しそうな顔と声色をした。

本当に微かな変化だが。

分かりにくい人だが、信頼には値すると思う。

「多少なら」

「……今、お前を拾って初めて良かったと思ったぞ」

やっぱり、ちよつとは厄介者と思われるってたんだなあ。

何時までもこの立場に甘んじているわけには行かない。

速い所、なんとかしないといけないな。

食事の後、朝日に照らされながら俺たちは出発した。

道中、絶えずヴァイスが周囲に怪しい影が無いが気を配っている事が良く分かった。

怪物や追いはぎに不意打ちされるのは俺だつてごめんだ。

こういうところはヴァイスは旅慣れているらしく本当に頼りになる。

「タジンの町が見えてきたぞ」

いくつか丘を越えたところで街が見えてきた。

高さは大体三メートルくらいのレンガの壁に囲まれている。

「行くぞ」

「うーす」

門のところでは草木染と思しき赤や緑のチュニツクのような

衣服を纏った商人らしき人が馬車を門の中に入れている所だった。

周囲には皮鎧や金属製の鎧を纏った護衛や傭兵らしき人たちの姿も見える。

順番を待つて門の前にたどり着くと門番らしき人に呼び止められる。

「そこで止まれ。身分を証明するようなのは持っているか？」

ヴァイスは黙って荷物から銀色のプレートらしきものを差し出す。

「バスターか……何時もご苦労さんだな」

門番らしきおっさんは俺のほうをジロジロ見ている。

「見慣れない格好だな……」

「そっちは俺の連れだ。バスター見習いをやらせようと思っている」

「ふむ……」

いぶかしげな目線を送る門番のおっさんにヴァイスが何かを握らせた。

小さな丸い金属……銀貨のように見える。

「いつも大変だな。これで酒でも飲んで体を温めるといい」

途端に門番の顔が疑惑から喜びに塗り換わる。

「おう、こいつはすまねえな。へへ……話の分かる奴は嫌いじゃないぜ

おい、もう行っていいぞ。そっちの餓鬼も死なないうつ頑張ることだな」

門番のおっさんは掌に握った銀貨に集中して俺たちをもつ見ていない。

やっと俺たちは町の中に入れた。

「マジ助かったよヴァイス……俺はこっちの身分なんか有りはしないからなあー」

「忘れていいぞ。金で解決できる面倒もあるということだ。

……その服は目立つし余り戦いには向いていないな」

「変に注目を浴びるのもやだしな

また頼りっぱなしだな……ほんと悪い……」

ヴァイスに申し訳ないし

なにも何も出来ない自分がちよつとみじめだった。

「忘れていい。初期投資は仕方が無い。

お前にとつて幸いなことに俺は賭けもやらんし

女を買ったり酒や煙草もやらんから蓄えは少々有る」

ほんと禁欲的というかストイックな人だな……

「マジでありがとうございますアニキ……」

自然とそんな言葉が口をついて出た。

なんだろう、なんだかそんな感じがするんだ。

自分に兄弟や兄が居たらこう呼んでいたと思う。

「アニキ、か……」

ヴァイスはなにやら考え込んでいたようだったが

直ぐに軽く頭をふって俺にこう告げた。

「まあいい、宿を取ったら服と鎧、それに武器も見繕わなくてはならん。」

他にもやること覚えることはいくらでもある、ぐずぐずするな」

「はいっ！」

ぐだぐだと考えるのは後でも出来る。

いまはやるべき事をやるだけだ。

## 第二話・最初の街（後書き）

バスターになる為に最初の一步を踏み出した主人公。  
いまだにヒロイン未登場。女っ気が無いなあ。  
本格的に魔法を習得するのは何時になることやら……

### 第三話・敗北、打ち砕かれた偽りの自信と再起

「どういうことだよ！ふざけんな！幾らあんたでも言っていることと悪いことがあるぞ！」

俺はヴァイスに食って掛かっていた。

武器を選ぶ前に、武術の経験の有無を聞かれて剣道を今をやっている事を言っただが

街の空き地で木の枝を使って実際に一通りの型を見せた所で言われたヴァイスの一言が余りにも許せなかった。

「……貴族の遊びの剣だな」

奴は冷たくそっけなく興味なさげにそう言いやがったのだ。流石にこれはカチンと来る。

俺は遊びで剣道をやっていたわけじゃない。

自慢じゃないが同年代の学校の剣道部の中では敵は居なかった。先輩のキツイしごきにも耐え自主練習も欠かさずにやってきたというのに……

それを遊び？日本の剣術や剣道への侮辱。

それは俺のやってきた努力への侮辱だ。

「……面倒だ。俺に一撃当てられたら今の事は取り消してやる」  
ヴァイスが剣の鞘を手に持ちかえてなそう言った。

「ああいいぜ！あんたかどんだけ強いかしらねえけど吠え面かくなよ！」

「……掛かってこないのか？」

ヴァイスの声はあくまで冷淡だった。

「上等だ行くぞこの野郎！」

自らを奮い立たせるように  
思いっきり突きを繰り出して……  
しまった、と少し思った

突き技は本来は強力な殺人技。

竹刀でも突きの入り方や角度しだいでは防具を通りこして生身の喉や首に掠めることがある。

危険度が高いため中学までは禁止されている。

（あれだけ大口を叩いたんだ、なんとか出来なくても文句は……）あつけないほどにあつさりと

ガツ、と軽く先端を往なされた手ごたえが手に握る木の枝から伝わった。

やべっ、強い。

さっきの一撃に微妙に迷いが入ったのが自分でも分かった。

ヴァイスの目には全く同様が見られない

とはいえ余裕で受け流せる時点でかなりの

そこまで一瞬で考え、即座にヴァイスの打ち込みが来た。

速っ、受ける俺　間に合え……っ！

「おっ、ごっ……」

脇腹から全身に駆け抜ける激痛。

受けたはずなのにガードごと叩き込まれた。

こんなに重い剣今まで受けたことがねえ……

「分かったか？お前の剣が遊びだということが

実戦だつたら今ので死んでいる……

雪平、お前の剣は軽いんだよ」

「軽い……俺の剣が……軽い……？」

「打ちのめされても握った獲物を手放さない根性だけは立派だが

……余りにも未熟すぎる」

シヨックで目の前がゆがむ。

当たり前だ。打ち合いで剣を　いま握ってるのは木の棒だが

竹刀を取り落とすものならどんなキツイ事を言われるか分かったもんじゃない。

少なくとも俺のもといった道場じゃそうだった。

「余りにもお粗末だったぞ。対峙した時点で俺の力量は薄々分かったんじゃないか？



躊躇ったお前が未熟なんだ」

ヴァイスの言うことはいちいちもつともだ。

なんとなくだが、対峙した時点で相手の気迫、身のこなしで相手の強さを察せられない奴は強くない。

それで油断した俺の未熟と迂闊さが恨めしい。

「察するに剣術それ自体の完成度は低くない

剣術自体への発言だけは訂正してやる

剣さばきと足の運びを見ていたが……

最小の動きで人を殺すのに洗練された剣だ

だが使い手がこれではな……」

そうだ、その通りだ。

日本の剣術や剣道自体がダメなわけが無い

ダメなのは、俺だった。

「俺……そんなにダメだったのかよ」

「未熟だったな…… お前の為にはつきり言っておくが……

バスターとして生き残りたいなら今までの剣術の常識は捨てた方が

お前のためだ」

「……どういうことですか？」

「お前のやって来た剣は人間相手の剣で怪物相手の物ではないからだ

お前の軽い剣では怪物の分厚い肉皮、或いは甲羅や鱗に歯が立たん」

確かに……

日本の剣道はあくまで「人」相手のものだ。

そんなことを想定していない。

「それにな、お前剣で生き物を殺したことが無いだろう。

生きるか死ぬかの気迫がまるで無い。

お前のは壁の中で貴族が剣というそれにそっくりだ。

安全圏の練習で幾ら強くてもそれは貴族の遊びに過ぎない」

悔しいけどこれも全くその通りだと思う。

死自体が今の日本では遠い。

昔の人はこれが練習や稽古がずっと続けばいいのに、と思っていた

という

話を昔道場の先生から聞いたことがある。

昔で練習や稽古でキツイ疲れたと手を抜けば本番で死ぬのに決まっている。

鍛錬不足〃死の時代ではないから

今思い返してみれば同年代の友達は

練習キツイとか防具が匂うとかへタレたことを言う。

考えても見れば俺はガチで命の掛かった世界など知らなかった……

「悔しい……」

心が軋みを上げる。

しんどいのに痛いのに臭いのに熱いのに寒いのに耐えて練習してきたのに……

負けたのも、自分が未熟なのにも。

負けて悔しくない？ そんな奴が居たら俺は蹴っ飛ばしてやりたくない。

負けたのに悔しくない？

そんなのは負け惜しみだ。

何一つ一生懸命頑張ったり真剣にやったこと無いやつだけが吐くセリフだ。

男が吐いていいセリフじゃねえ。

「人と比べて得た自信など偽りだ。

お前を待つ戦いはこんなものではないぞ。

怪物は情けも容赦も持たず殺しに来る。

覚悟と鍛錬をもってしても容易く人は死ぬのだ。

ならばどうする？ 此処で止めるか？

今ならまだ戦いの道に踏み込まず暮らしていけるぞ？」

人と比べて得た自信がいかにも偽りかは今、俺は知らされた。

怪物は容赦なく殺しに来るのも本当なのだろう。

「冗談じゃねえ……」

歯を食いしばり俺は心の底から叫んでいた。

「生きてりや負けることもそりやあるだろうさ!!  
頑張ったって負けることもあるだろうさ、だがな!!

ここで逃げたら、生きることには妥協したら俺は二重に惨めじゃねーか!!

負けたまま逃げるのだけは嫌だ!!」

本当に思い描いたことを捨てて……

自分に負けたことを抱えて生きるのはきつと恐ろしく惨めなのだろう。

誇りを捨てても生きていける?

現実を思い知るのが大事? そんなのクソくらえ、だ。

必ず死ぬのなら、絶対に嫌だという事は魂の芯。

それを折られたまま生きれるほど俺は器用でも賢くも無い!!

「……それだけ吠えられるのなら、お前はきつといいバスターになれる。

時間を食ったな。だがお前の慢心を打ち砕けたから結果的には良かったのだろう」

「ヴァイスのアニキっ!!」

いぶかしげにヴァイスがこちらを見た。

「ありがとうございます!!」

俺は心の底から頭を下げて、こう言っていた。

この慢心を抱えたまま戦っていたら俺はきつと最初の戦いで死んでいた。

自分の都合の良い事を言ってくれたり

やってくれたりするのが本当に良い人だとは限らない。

こういうとき、形式的でポーズではない

何故対戦相手に礼をするかの意味を本当の意味で体得した気がする。

「……ついて来い雪平、お前に似合いの武器を選んでやる」

ヴァイスは僅かに温かみのある苦笑を浮かべながら、そう言った。

何だかんだあるけど、やっぱりアニキはいい人だと思う。

「よろしくおねがいしますっ!!」

### 第三話・敗北、打ち砕かれた偽りの自信と再起（後書き）

この世界は【幻想的】では有りますが【遊び】ではありません。

苦心惨憺して身につけたものが役に立つとは限らない哀しい現実。

日本の剣術自体の完成度が低いわけでは有りませんが

それは戦国時代と同等の修練を己に化した時のみ。

命の危険の無い安全な練習で同年代の者に勝つくらいで強者と勘違いし

極めても居ない道場剣法で怪物に突撃すれば死にます、あっけなく。

#### 第四話・似合いの武器

俺はヴァイスに連れられて町の武器屋に入った。

「本当は各種武器の専門店でオーダーメイドしてもらうのが一番いいが……」

「買って貰えるだけで十分にありがたいよ」

店内に入ると様々な武器が置いてある。

そのどれもが一般的にイメージする武器より大きく、重そうだ。持ち上げられるか疑問に思うほど大きなハンマーや両手剣。

長物は長い柄の先端に斧の付いたポールアックスや大薙刀に似た武器。

少しでも俺の今までやって来たことに近いのを探そうと見つけた常識的なサイズの剣もなんだか違う。

まるで剣というよりは非常に頑丈そうなごついひし形の針や杭……ヴァイスの使っている武器にちよつと似ている。

「人相手ならここまでのごつさも頑丈さも重さもいらねえな……切れ味なんか二の次三の次……」

折れないこと曲がらないことを大事にして体重と加重を利用して相手に突き入れる武器だわこりゃ」

本当に人相手を想定していないことがはつきり伺える。

「お前はそれは止めておいた方がいい」

ヴァイスに言われちよつと傷つく。

「……お前が使うべきなのはこいつだな」

そうヴァイスが指を刺したのは馬鹿げたサイズの片刃の大剣だった。先ず最初に頭をよぎったフレーズは斬馬刀。

本当にアニメかゲームに出てくるような武器だ。

剣の幅も厚みも尋常じゃない。

長さは一メートル強くらいか？

剣の横幅は思い切り広げた親指と人差し指の幅くらい。

厚みは一センチ近い金属の塊……

「……こんな振り回したら直ぐ筋も手首も何もかも逝きそうだな」  
脱臼や筋の断裂の故障の恐怖が頭をよぎる。

スポーツをやっている人なら理解できると思うが  
体に付いた怪我の故障は癖になる。

ヴァイスが呆れたように呟く。

「……何の為に教会や治癒の魔法が有ると思ってるんだ」

「はい？」

多分俺は間抜けな顔をしていたんだと思う。

「ちょ、ちょちょちよつとまで、直るのかよ!？」

体の奥に付いた傷や筋の断裂つて後引くし基本的にはなおら  
ねえんだぞ!？」

「何処の常識かは知らないがそれは捨てた方がいいな。

病とか手足を怪物に喰われたり腐ってしまった場合ならともかく  
治癒の魔法や霊薬を使えば怪我なら繋がっている限り大体直る。

前より強靱になるくらいだ」

「直んの? 完全に?」

「怪物との戦いで千切れた手足を繋げてる所くらいみたこともある。  
復調しなかったという話は聞かない。

戦いで死んだという話なら飽きるほど聞くが」

流石はファンタジーだぜ……

元の世界に帰ったらスポーツ医学とか医者関連がひっくり返るな……  
でも故障を気にせず訓練やトレーニングが出来るなんて……

格闘家やスポーツ選手の夢が此処に有るなあ。

「そんなことより、その剣を持ってみる」

「……こうか?」

腰に力を入れて剣を持ち上げようと踏ん張る。

何とか持ち上げることはギリギリできた。

ぐっ……想像していた以上に遥かに重てえ……

一度筋トレのときにバーベルの重りを抜いた鉄の棒を持ったときよ

りも重い……

重量何キロあるんだよこれ……

確か竹刀の重さの最低は480グラムでそれ以下だと

試合の時の計量で弾かれたから……

しかしその竹刀でも長いこと振ってると重たく感じるんだぞ……

手がプルプルする、手首がイカレそうだ……

「ふむ……」

「はあ……はあ……剣ってさ……」

同じ重さでも握りのフィット感や剣先か鰐元かどっちに重芯があるかで

大分重さの感じ方が変わるよな」

「ああ、それはあるな……自分の手に馴染むかどうかは重要だ。

だがそれは自分の剣をオーダーメイドして貰う時の楽しみに取っておけ。

先ずはその剣に慣れる事から始めないと」

「振り回されてるようじゃお話にならないもんな……」

「そうだ、振り回されるんじゃない、振り回すんだ。先ずはそこからだな。

だがその剣はお前に似合いだ」

言われて見ればなんとなくこのクソ重たい剣は他人の気がしない。

「とにかく豪快かつ大胆に、細かいことを考えず力の限り振り回し、その重さで叩き斬れ。

細かなテクニクや立ち回りは追々覚えていけば良い。

その剣ならば分厚い筋肉や硬い鱗や皮、甲羅を持つ怪物も当たれば只では済まん。

自在に使えるようになったとき初めてその重みが頼れる相棒となる」  
今まで慣れ親しんだ剣を捨てる事に抵抗はあったが……

それでも、此処は異世界。

郷に入っては郷に従えという言葉もある。

「……やってやるさ、一日も早くな」

「分かっているとは思うが十分扱いには気をつけろよ。

まかり間違つて落としたり人に当たったりしたら大事になる。担いで持つて歩くだけで十分修行になる」

確かにその通りだ。間違いなく体力が付くだろう。

気を張つてなきゃな……

「肩に担ぐで背負う為のベルトも要るな。

次はそれに合わせた鎧もいる。

こっちは時間を掛けて選ぶぞ。命に直結することだからな」

次は防具屋か……バスターへの道は遠そうだが弱音は言ってられねえな。



## 第五話・防具選び

俺とヴァイスは武器屋での支払いを終えて防具を選ぶ店に向かっていった。

武器の支払いの時にヴァイスがバスターカードを見せていたのが気になったので質問してみた。

「そういえば武器屋の支払いのときにバスターのカードを見せていたのってなんだ？」

「ああ、あれか。バスターカードは商店や宿で提示すると割引が利くんだ」

「へー。便利だな」

「命がけで怪物と戦うバスターへの支援策の一つなんだ。

ただしバスターの資格だけ取って割引サービスだけ

受けようなんて馬鹿が出ることを防ぐため

魔物の討伐記録か冷孔の解放記録の

どちらかが無いまま二ヶ月を過ぎると失効する。

ヒーラーだけ職業の特性上少し毛色が違うが……」

なるほど、色々考えてあるんだなあ。

しかし割引をしても結構な量の金貨を俺の武器の為にヴァイスは支払ってくれた。

これから稼ぐにしても気合入れてかねえとなあ……

「さて着いたぞ、次は防具だ」

俺たちは防具を扱う店に入店した。

金属や鉄の金気のある匂い

それに皮や布、その他得体の知れない獣っぽい匂いもする。

日本の靴屋や服屋にも一種独特な匂いは有るがここまでダイレクトではない。

金属製の鎧や盾、皮製の鎧などは俺でも何とか分かるが……

明らかに謎の生物由来の素材で出来た防具なども置いてある。

「これ、怪物の一部で作った防具か？」

海老や蟹のような甲殻類の殻のような物を材料に作られた鎧を指差してヴァイスに尋ねる。

銅鎧に使えるだけのこれだけのサイズの甲殻を持つ蟹を想像してちよつと俺はゾツとした。

「そうだな、だが今の所お前には縁が無い。」

只でさえ重い大剣を振り回しながら重装鎧を身につけて戦えないだろう？」

それもそうだ。

「お前が選ぶべきなのはこっちだ」

ヴァイスが指差したのは皮鎧のコーナーだった。

「軽鎧を身につける前に鎧下を選ばなきゃな……」

当然俺は鎧の選び方や良し悪しなど分からないのでヴァイスに任せることになる。

それから俺たちは随分と時間を掛けて鎧を選んだ。

「鎧下の類……クローサーーマーやギャンベゾンも

身につけずに鎧を直接着込むと擦り傷だらけになるぞ」

「町の中の傭兵とかバスターらしき人にはあんまり気にしてなさそうな人も居たけど？」

町の中のそれっぽい人の中には、明らかに肌を露出した人も居た。

「中には機動性と動きやすさを重視して鎧着込まない奴も居るがな……」

怪物の種類によつてはキツイ一撃を貰ったら

そこで終わりつて奴も居るからいつそ鎧を着ないというスタイルもあるにはある。

だが素人の内から格好やルックスに気を使ってどうするんだよ。死ぬぞ？

そういうことは一人前になってから言うんだな」

もつともな意見だ。確かに半人前以下の段階で見た目を気にしている場合ではない。

「まあ、お前のスタイルだと大剣使いだからほぼ軽鎧一択だな……」  
ヴァイスの意見を参考にしつつ俺は鎧や装備の試着を繰り返した。  
「フィット感や動きやすさが生死の境を分けるから気に入るまで慎重に選べ」

幾つもの籠手や肩パッドや膝パット、ギャンベゾンやクロースアーマー……

何着もある皮鎧をひたすら着ては動きを確かめ、脱ぐ作業。

「そういえば魔力、とか魔法の掛かった鎧とかもあるのかな？」

気になったのでヴァイスに聞いてみることにした

「当たり前だろ？ 防護や軽量の術式が刻まれた服や鎧などの防具は当然存在する。」

だがお前の先ずやるべき事は軽鎧をつけた状態での動きに慣れてからだ。

最初から魔法頼りにして基本の動きを疎かにして良い訳が無いだろ」

「気になったから聞いて見たんだ。はなから頼る気なんかねえよ」

「そのあたりはバスターに慣れてから防具に不足を感じるなら自分で金を貯めて買っただな」

「そうするよ」

再び防具の感触を確かめる作業に戻る。

しかし、防具を着け外しする作業というのは思っていた以上に時間が掛かるもんだな。

何時間掛かっただろうか？

ようやく、一通りの防具を選び出す作業が終わった。

「まだぎこちなく着慣れない感じはするが中々様になってるじゃないか」

「そうかな……？」

俺が今現在身につけているのは

体にフィットする黒く染められた皮製の全身ツナギ。

日本であつたライダースーツに良く似ていてデザインもそれほど悪くないように思える。

そういえばライダースーツはもしものとき擦過傷を防ぐため実用性があることを思い出した。

その上から金属製の肩パット、肘パット、膝パット。

思っていた以上に動きを阻害しない。

籠手は皮と金属を合わせた物で手の甲の部分には金属板が張られている。

空手やスポーツで使うファウルカップに似た局部を覆う物も身につけている。

重要なことはわかるがちょっとそのままでは気になるところだったが胴体部分を保護する黒の皮鎧がそれを目立たなくしてくれる。

鋳を打ち込まれて強化されており、色も黒く染められているので皮鎧なのに

そこまでデザインは悪くないように思える。

靴自体は日本で買ったスニーカーのままでヴァイスに問題ないといわれたのでこのままだ。

これだけでもなんだか十分強くなったような気分にしてくれる。

「そこまでさせておいてなんだが、防具自体は決して過信するな。

あくまで怪物との戦闘で受ける擦り傷程度の軽い攻撃のみ防いでくれるだけだ。

避けるのに徹しろ。そして大剣を使った防御技術も覚えてもらおう。

怪物のいい攻撃を貰ったら死ぬと思え」

今まで選んでいた時間を全否定するようなヴァイスのあんまりな発言に思わず突っ込んでしまう。

「それってつける意味あるのか？」

ヴァイスは出来の悪い生徒を見る教師のような眼で俺を見た。

「……お前もままごと程度とはいえ剣を振っていたなら心当たりはないか？」

小さな擦り傷や傷の痛みで集中を乱された経験は？」

うつ、心当たりがある。滅茶苦茶強い一撃を貰うと胴や籠手越しにも痛いんだよな。

今まで精神力で何とかしてきたつもりだったが……

「何の為に俺が鎧を着込んでると思ってるんだ。」

怪物との戦いで万全を期さなくて良い訳が無いだろう。

痛みを堪えるには集中力と精神力が居る。

まだ奴らと殺り合ってたことが無いからわからんだろうが

僅かなこととはいえ無駄に精神力を失うのが

怪物との戦いでどれだけ痛手になるか全然分かっていない。

防具をきちんとつければそんな些細な些細なことでも避けられる可能性が生まれる。

死に易い素人ならなおさら必要に決まってるだろう。

戦闘の些細な事を疎かにする奴は何れ負けるし、怪物との戦いで負けは基本的に死だ」

「……生意気言ってますいませんでした」

確かに、小さなことの積み重ねは大事だと俺も思う。

「分かれば良い。まあバスターの実情を知らないから仕方ない面もあるが……」

おいおい覚えていけばいいさ」

「はい……」

「ああ、あと何故俺が極力魔法抜きでお前を鍛えようとしているか分かるか？」

ヴァイスにそんなことを聞かれた。

ヴァイスに言われた事今まで聞いてきた事を総動員して考えてみる。そういえば冷孔の無い所では魔法を使うとき精神力と生命力を直に使うと言っていたな……

「魔法に頼るようになると油断が出来て不味いから？」

ヴァイスは少し頷くようにして続けた。

「それも勿論ある。だがそれだけでは正確じゃない。

正確には前衛のバスターとして大成できなくなるからだ。

確かに魔法は便利だ。軽量化や強化が施された武器防具や補助魔法、攻撃魔法。

前衛でも魔法が使えるのに越したことは無いしその恩恵は計り知れない。

だが……解放されていない冷孔の主と相對するときの勝手は随分違う」

「なるほど……」

「閉ざされた冷孔の主と戦うとき

魔法を使うには生命力精神力を嫌でも消耗することになる。

俺たち前衛で武器を取って戦う奴らは魔法のあるなしに戦わねばならんだ。

雪平、お前は使えるものを何でも使うという道を最初に覚えさせたくは無い。

魔法で強化した武具防具を身に纏い……

町の周りで既に開かれた冷孔の補助を受けて

比較的安全に地上をうろつく怪物だけを倒す……

そういう道もあるし大多数のバスターはそうする」

「それで自分が強いと勘違いすると不味いってこと？」

「その通りだ。それで強くなったと勘違いして冷孔の主に挑んで

無残に壊滅したり命を落としたバスターを幾つも俺は見てきた。

魔法が使えなくなった時点で心が折れたり動揺を表に出すようでは前衛として話にならん」

なんか眼に浮かぶようだわ。

使えるものを使って何が悪い！って感じで。

魔法や武器や防具の強さを自分の強さだと勘違いするとか周辺の怪物にラクに勝てるから生半可に自信着いちゃって……

自分だけは例外、って思って冷孔に特攻する様を……

そりゃまあ、使えるものを使うことは悪いことじゃないんだけどなんだろっこの違和感。

使えるものを使うことに対する危うさと言っかなんと言っかな……その危うさってどっかで見たこと有るぞ。

「……使えるものは使う、その事自体は構わないんだけど

慣れないというよりは自分のものにしていない事が不味いのか？

教習所出たてのペーパードライバーが走り屋紛いの爆走するようなもんか。

そら事故るよなあ……となるとあれか。

最初から魔法頼りつてのはオートマ車に乗って

町の中回るみたいなもんでそれじゃレーサーや走り屋にはなれねえ。素の自分のテクニックを磨かねえとな……

魔法に頼り切るってそんな感じなのかなあ」

「そのオートマ車とかペーパードライバーとか言うのは良く分からんが……」

ヴァイスが良く分からないといった表情をしている。

あ、やべえ。俺には分かるかも知れないけど

こつちには自動車とかねえんだ。

そういえばこつちに來てから馬車は有っても自動車は見かけなかったなあ。

「ええと、車つてのは馬車とか乗り物とかそういう感じ」

この説明でいいのか？もつとちゃんと説明した方が良かったのか？

「なるほど。そういうことならわかる。」

どうやら大体俺の言わんとしているところを理解したようだな」

「便利なものを知るのはきちんと基礎を身につけた後からでいい、つてことだろ」

「そうだ。魔法の補助を受けないことは最初は辛いし勿論危険になるが……」

怪物の危険を肌で感じ取れるし最終的な地力が全く違うようになる。

雪平、全てに慣れる。武器にも防具にもだ

これから一週間ほどで地上をうろついてる怪物との戦いで使い物になるように

お前を鍛えていく。一週間後には魔法抜きで怪物を実際に一体狩って貰うからな」

「わかった、やって見せるぜ」

俺は躊躇い無くそう答えることができた。  
辛いしキツイ道だが、それでこそやりがいがあるというものだ。



## 第六話・修行、遙かに遠い故郷と風呂と音速剣

俺はヴァイスの指導の元、只管に修行と鍛錬に打ち込んだ。皮鎧に身を慣らし、明けても暮れても大剣を振る日々。

「……腕の力だけで上手く振れる訳が無いだろうが」

「これじゃダメか？」

「それじゃ直ぐに手首を傷める。」

もつと足の踏み込みから腰の捻り……

全身の力を使うんだ。

出来るまで今日はやってもらうからな」

中々に難しい。

竹刀とはまるで勝手が違う。

これだけの超重武器を扱ったことは無いからな……

修行の時間は実際以上に長く感じられた。

しかし密度の濃い充実した時間だった。

「まずは縦に振ろうとするな。」

担いでからの縦の切り下ろしはその性質上溜めが出来て重さが乗せられるから威力も大きい分隙もできる。

まずは隙を最小限にすることから考える

縦の攻撃は自在に振り回せる臂力と技量がついてからでも遅くは無い」

「はいっ！」

この横振りの攻撃というのが難しい。

全身の力をフルに使わなくちゃならないから

腕も足も酷い筋肉痛になった。

それでも止める訳にも投げ出すわけにもいかない。

やると決めたんだ。

こんな所で止めたなら何の為に始めたかも分からなくなる。

「剣を持ったままあの木まで可能な限り早く走れ。」

剣先を地面に引きずるなよ」

なるほど、この訓練がどういうのを想定しているのかは良く分かる。剣を持ったままどれだけ速く敵に詰め寄れるかは大事だ。

構えを作っては構えを解く訓練もやった。

これを可能な限り素早く行う。

これは防御姿勢の訓練だと理解できる。

……分かっていただけだよっぱり辛い。

肉体を酷使し苛め抜く過程、辛いものは辛い。

そういえば元の世界の体育会系の部活動全般の事を思い出す。

こういう地味で基礎訓練が嫌で辞めて投げ出してしまふ奴らもとても多いことに。

でもやっぱりそういうのを受け入れて何処まで自分で頑張れるかによつて

何処まで伸びるかは決まってくると思う。

何処まで育つかも分からない、才能は未知数で頑張っても成果など上がらないかもしれない。

そういうことに努力という水を与え続けることの出来る

環境や意志の強さを持ち続ける事が出来る方が珍しいのだと俺も思う。

何処かの誰かが言っていたがやはり学校は箱庭なのかもしれない。

俺たちは箱庭の中の小さな才能や優劣ばかりに眼が行って

努力することの意味を何処かに見失って忘れてしまいがちだ。

俺の今やっている鍛錬、努力、訓練、修行は

元居た世界でいう頑張りとは何かが違う、絶対に違う。

止めれば、緩めれば、死ぬ　そういう類。

弱い心に流されて少しでも手を抜けば今此処で死ななくても怪物と戦えば恐らく死ぬ。

情けも容赦も無い相手が本気で殺しに来ることが

そう遠くない未来に確定している……そういう類の剣の修行。

そつ、現代では銃を使った戦い方が主だから

恐らくは戦国時代の武士やらがやったのに近いと思う。

今、俺は自らの生存を掛けて剣を振っている……

「ああ、これがただの訓練だったら――！」

俺は叫んでいた。

心の底から今こそそう思う。

ヴァイスは何も言わない。

ただ黙って俺が剣を振る所を見ている。

腕が完全にながらなくなった所でヴァイスがようやく口を開いた

「……少し体を休める」

その時は返事をする気力も無かった。

呼吸が落ち着き、筋肉が溶けそうな疲労を抱えながらも俺は考えていた。

恐れないためにはどうすればいい？

死なないためにはどうすればいい？

ただ只管に、そう浮かぶ迷いを

現実の手法と具体的な行動に切り替えていかなばならない。

生き残る為に。生き残って怪物を倒し、強くなって冷孔を開いて元の世界に帰る為に。

勝利しなければ俺には真の安らぎは訪れない。

かといって手を休めれば心折れたまま妥協と偽りの人生が待っている。

それだけは……それだけは嫌だ。

例え死ぬことになるうとも耐えられない。

思考が必要なことに戻す。

必要以上の恐れは邪魔だ。

恐れて縮こまり、筋肉が萎縮すれば剣は振れまい。

恐れる心を黙らせて、集中すべきは相手の動きと自らの動きの把握。

恐れるくらいなら叫びでかき消す。自らを誤魔化そうとも。

俺自身の継続戦闘能力はどうだ？

元の世界の記憶を必死に掘り出す。

計算が苦手な俺でも、元の世界での最速レベルでの剣速は覚えている。

確か構えから打突まで0.1秒。

……戦闘中の5分、試合中の5分って無茶苦茶体感時間長いんだよなあ……

予備動作や駆け引きを無視すると

最低でも300秒戦い抜くには300回は振れるようにしておきたい……

そんなことを昔考えたことを思い出す。

15分で大体900回……実際はそんなに数を振る事は恐らく無いが。

そういえばそれに合わせて漫画やアニメ、ゲームで出てくる……

音速剣とか剣から衝撃波とか出すのってどれくらいの速さが必要かも考えたことがある。

音速は340メートルを1秒で進む。

一振りの速度が0.0025秒で400メートルを一秒。

三十四倍の速度で動ければ音速剣が可能。

ブン……ブン……とかもつさり、という擬音表現が余りにぴったりなこのクソ重い剣だと気の遠くなる遠さだ。

零一つの桁が余りに遠い遥かな領域。

幻想に近い遥かな領域だといって、目指していけない理由なんか無い。

……もしも魔法がこっちにあるなら、何時かやって見せる。

遥かに遠い世界の故郷も、遥かに遠い剣も、目指して何が悪い!!  
そういうことを考える余裕が来ると

ふと自らの体の臭いが少し気になった。

「そういえばこっちに来てから熱い風呂に入ってねえなあ……」

こっちのファンタジー異世界に来てから余りにも余裕が無さ過ぎた。  
宿では水場で体を流してゴワゴワした布で体を拭いていた。

元の世界で学校で練習が終わったあと学校のシャワー室を借りて

そのボイラーが調子悪くて冷たいシャワーを浴びた気分によく似てる。

我慢できないことは無いけどさ。

「ヴァイスさん、こつちの世界に熱い風呂ってないの？」

「前から思っていたがちよつと贅沢な奴だなお前は。」

熱い湯が張られた浴槽は設備が整ってる高級な宿屋とか

王侯貴族の贅沢品だぞ」

お前の装備とかで色々蓄えが心ともない、とヴァイスが付け加えた。

「あー、こつちではそうなるのか……まあ我慢できないことはねえけどよ……」

もう一個頑張る理由が出来たな……絶対に早い所風呂に入れるようになつてやる」

第六話・修行、遙かに遠い故郷と風呂と音速剣（後書き）

女っ気の無さはそのうちどげんせんといかなあ。

## 第七話・初陣

そして、一週間後の朝がやって来た。

「おい、起きろ雪平」

「おう……」

「今日は町の外に出るぞ」

これが初陣か……緊張するぜ……

これから命がけの戦いが始まるかと思うと……

軽鎧を身につけ、大剣を持って

ヴァイスに連れられ町の外に出る。

門番のおっさんに生きて帰って来いよといわれた。

不安をあおるような事を言わないでくれよ。

「この辺りの怪物の特徴は頭に入っているな？」

「スラだっけ？大丈夫だ」

命が掛かっているから必死にもなる。

「まずは単体でうろついている怪物を探す」

程なく草原を這う怪物の姿が眼に入った。

一メートルくらいのダンゴムシに似ている。

赤くて硬そうな殻には凶悪な短い棘が生えている。

ヴァイスに聞いたスラという怪物の特徴と一致している。

「まずは俺が手本を見せるから良く見ている」

声を落としてヴァイスは言い、剣を抜き放つと駆け出す。

速い……そして軽やかに跳躍すると

殻と殻の継ぎ目を縫うように

ヴァイスの持つ黒い杭のような長剣が体重を乗せて怪物を貫く。

鮮やかな奇襲だった。

スラと言っらしいダンゴムシの怪物は

ピン止めされた昆虫標本の用にもがいていたが

やがて怪物は動かなくなり、殻だけを残して

その血肉は湿った砂のような物質にあつという間に変わった。

「奇襲で殺せるなら一番良い。怪物の動きに慣れるためにもお前には動いている奴も相手してもらおうが……」

本来は無駄にダラダラと戦いに付き合う必要も無いだろう」

ヴァイスは手馴れた手つきで元怪物の殻と砂を掻き分け

ピンポン玉のサイズの透明な丸い結晶を取り出した

「これが怪物の核だ」

「これが核なのか……」

これも事前に説明を受けたがこの結晶には魔力が封入されているらしい。

使い道は多岐に渡り

バスターの討伐記録にもなるからきつちりと集めるように言われた。

「一番最初はサポートしてやるから怪物を狩って見る」

「わかった」

「適当な獲物を見つけたら俺が雷で動きを止める。即座に斬れ」

また単独でうろついているスラを探し……見つけた。

以前の獣避けの結界を張るのは除き

ヴァイスが魔法らしい魔法を使う所は初めて見る気がする。

音も無く黒い長剣でスラを指し示すと……

「雷刃」

ヴァイスは散文的、端的にそれだけ呟いた。

長々とした詠唱も大げさなジェスチャーも何もない。

即座に効果は現れ、一筋の雷光がヴァイスの剣の先端から迸る。

雷に打たれたスラが黒煙と焼ける臭いを漂わせ這いずっていた動きを止める。

「やれ！」

魔法の効果に驚いている暇も無くヴァイスが合図した。

「うおおおおおおおおおっ!!」

俺は気合と共に駆け出し、怪物に肉薄する。

スラが大剣の範囲に入った瞬間



大地を踏み込み得た力を腰から腕に伝えそして大剣を振るう。

遠心力の乗った大剣が怪物の殻に激突し……

恐ろしく硬い手ごたえを返す。反動で弾き飛ばされないよう踏ん張りさらに遠くへ大剣を振り切る感じをイメージして……

「つつしゃあ！」

怪物が折れた棘と斬られた傷口から体液を巻き散らしながら僅かに吹っ飛んだ。

明らかに深々と切り裂かれており……やがて動かなくなる。

こいつも先ほどと同じく殻の一部と核だけを残して湿った砂になる。

「やった……」

思わず深い安堵のため息が漏れた。

「……良くやった」

「あざっす！しかしこいつら本当に硬い……」

「次は一人で動いているスラを相手にしてもらおう」

今よりよほど危険だぞ。窮地に陥らない限り助けないから覚悟を決めておけ」

次は動いているこいつらか……まだまだ気が抜けなさそうだ。

## 第八話・急襲

ヴァイスのサポート付だが俺は初めて怪物を斬った。

一メートルはあるダンゴムシのような怪物、スラの核を拾うと今度は動いている奴らを倒すことになった。

怪物の動きに慣れる為に。

「分かっているとは思うが刃の角度と位置が悪いと切れずに剣が轢かれるだけだぞ」

「心配すんなって」

あいつ等は縦回転してくるらしい。

当てる剣先の位置が回転するスラの中心より下だと叩き斬れないだろう。

再び町の外、魔物避けの結界の範囲を外れた草原をうろつく。

単独で地面を這いずるスラを見つけると、俺はこちらに注意を引くために小石を投げた。

「ほら、かかって来いよ！」

そう挑発すると怪物の反応は劇的だった。

丸まってこちらの方に突進してくるのだ。

坂も無いのにその勢いは強烈だ。

まるで自動車……しかも巨大なトラクターについてるごついタイヤだけが

こちらに外れて飛んでくるようだ。

しかもこのスラというダンゴムシに似た怪物の殻には凶悪な棘がついている。

その棘が地面を抉りながらこっちに来る。

あの速度の突進をまともに喰らえば大怪我をすることは間違いない。恐怖を感じないといえは嘘になる。

だが、あいつの動きは直線的でこっちの体に体当たりしようと狙いをつけている。

それさえ分かれば……

「ここだあつ!!」

俺はスラの軌道変更が不可能なタイミングで  
体を左に倒しながら踏み込んだ。

俺の持つ大剣が体の動きと踏み込みに合わせて振られ……

スラは俺の体がつい一秒前まで居た位置……

現在そこには遠心力を乗せて振られる俺の大剣の刃が待つ。

交差攻法、クロスカウンター気味に俺の大剣と回転するスラが衝突  
した。

大剣の柄から伝わる強烈過ぎる衝撃に手を離さないように握り締め  
やがて硬質の殻を打ち破り肉を裂く手ごたえに変わる。

刃が真芯でスラの殻を捉えた瞬間

スラの中身の詰まったタイヤのような構えは崩れ怪物の体がくの字  
にへし折れる。

へし折れただけでは相手の勢いも俺の大剣も止まらず、真つ二つに  
叩き斬った。

真つ二つに斬られた怪物がボスツ、ボスツ、と音を立てて地面に落  
ちる。

「よつし！狙いはばつちりだぜ！」

「お見事」

ふう……

僅か一合、長い訓練に比べて余りに短い戦闘時間だ。

でも実際はこんなもんなんだろう。

だが特訓のかいあって初撃で決めることが出来てよかった……

ダラダラと長引かせて良い事なんかない。

殺るか、やられるかだ。

本当の真剣勝負なんて初めてだったからなあ。

やっぱりとつと疲れが来る。

倒したスラの残骸を見ると程近い所に核が転がっていた

怪物が落としたコアを拾い上げながら俺はヴァイスに尋ねた。

「なあ、ヴァイス、こいつらって本当に生き物なのか？」

「どうしてそんなことを聞く？」

「なんというかその……気になったんだよ

俺たちの世界じゃこんな死んで直ぐに

砂に帰っちゃうような生き物居ないし……でもやっぱり生き物なのか？」

「こいつ等は断じて血の通う生命などではない……！」

妙にきっぱりと大声でヴァイスは断言した。

しかも物凄い剣幕だ。

聞いているこっちが驚くくらいに。

なおもヴァイスは続けた。

「怪物と魔物の全ては邪神と魔人の作り出した狂った玩具だ。

人を喰い殺すだけに作り出された哀しくも唾棄すべきモノだ。

絶対に止めさせねばならぬ。止めねばならぬ。

こんな不毛なことはな」

額に眉根を寄せてヴァイスがそういうのを俺は黙って聞くしかなかった。

彼の酷く強い意志と怒りを垣間見た気がした。

「……こっちに来て見ろ、雪平」

ヴァイスの手招く方向へ近寄ってみるとある物があつた。

「うげ……」

ヴァイスに言われるがまま近寄るとそこにあつたのは野ざらしの死体だ。

既に完全に白骨化しており割れた頭蓋骨や散乱した骨

それにこびり付いた赤茶けて変色した衣服の残骸らしき布……

錆びた剣が一振り転がっている。

「恐らくはバスターになろうとして怪物に殺された食い詰め者の末路だな」

ヴァイスの声は既に平坦に戻っていたが……

「こりゃひでえや……」

ヴァイスがあんなに怒りを露にしたのもわかる気がする。

たとえ宗教があった理由だとしてもこれを許せないというのは良く分かる。

「怪物が居る限りこんな事は日常だ」

「なんとかしなきゃ、つてのは良く分かるぜ」

なんまいだ、と呟いて俺は手を合わせた。

「成仏してくれよ……埋めてやらないか？」

「雪平には悪いが怪物が徘徊するこの草原でそれをする時間は……それにこつこのはこの辺りには幾らでも転がって……」

「それでもこのままにしとくのは……」

食い下がろうとしたとき、異変は起きた。

「うわああああああ！！！」

悲鳴のような騒ぎ声がここまで聞こえてくる。

二百メートルくらい先の町に続く街道の方を見ると一台の馬車が疾走している。

その後ろを馬車と同じくらいのサイズの怪物が追いかけている！

鋭角的なフォルムと銀色の金属質の皮膚。

体格を支えるには細い四本の足。

何より目立つのはメスのような形をした巨大な一対の刃の触腕……

まるで金属で出来た巨大な力マキリに似た怪物……

良く見れば馬車の幌の一部は無残に切り裂かれている。

「馬車が襲われている……マリウスか……不味いな。」

魔法耐性が高くて地上を徘徊する奴の中では強いほうだ」

「助けに行かないと不味いだろそれ！！」

「……先にいく……何れやりあう相手だ、お前も来い。」

だが間違つてもお前は奴の正面には立とうとするなよ」

そういつてヴァイスは風のように走っていく。

「ちよつと待て！俺はこの剣あるしアニキみたいに身軽じゃねえんだぞ！！」

大剣の重みがかなり辛い俺は可能な限りの速度でヴァイスの跡を

追  
っ  
た。

第八話・急襲（後書き）

ようやくそろそろ女の子が出せそうだ……

## 第九話・天使

「はっ……はっ……」

俺は大剣を背負って今まさに怪物に襲われんとする馬車に近づこうとしていた。

馬車を引く馬が苦痛にいなないたかと思うと地面にくずおれた。

不味い。馬が足をやられた様だ。

馬車を操っていた商人風の中年男性が悲鳴を上げる。

さっきの悲鳴の主だ。

このままでは馬車に乗っている人がやられ……

「疾き風よ、我が神の名の下に集いて敵を討つ槌となせ！風打！！」  
ヴァイスでもあの商人でもない。凜とした女の子の声だ。

馬車の後部から飛び出した女の子が怪物に向けて魔法を放ったのだ。飛び出した、というのは比喻表現じゃなくて、文字通り飛んで出たのだ。

その女の子の背には一対の白い翼が生えていて。

そして、紋章のような刺繍が施されたゆつたりと長いローブを風にはためかせながら

杖を持って空を飛んでいる。

「天使……？」

思わずそんな事を俺は呟いていた。

鋭角的な金属で出来たカマキリのような怪物マリウスは

仰け反る様に後退し、二、三回頭を振ったがそれ以上の損傷は受けていない。

「何でさっきから効いてないのー！！」

翼持つ少女は手にもつ杖を振り回して空中から苛立ったように声を上げていた。

「雷刃」

散文的で一切の誇張もない冷たい声がポツリと草原に響く。



一筋の雷光が怪物を包み込んだ。

「雷刃、雷刃、雷刃」

ヴァイスは二度、三度と繰り返して唱えていく。

その度に稲妻が空を割って閃いた。

ヴァイスの魔法が怪物の足を止めている間に俺は何とか合流することが出来た。

「ゼーっ……はーっ……」

荒い呼吸を抑えようと努力する俺にヴァイスが非常に早口で声をかけた。

「そのままでもいいから聞け雪平、マリウスには見ての通り魔法の効果が薄い。」

足止め程度の役にしか立たない」

良く見ればヴァイスの雷はマリウスと呼ばれた

デカイ金属製力マキリの化け物の表面を滑るように大部分が弾かれている。

弾かれた雷が空中に放電している。

「雪平、俺がマリウスの足を止めている間に後ろに回り込んで間接部を叩き折れ！！」

鳥人族の娘は奴の直上真上から風打！！」

「あ、あんた達」

飛んでいた女の子の疑問をヴァイスが遮る。

「後にしろ、今は話している時間はない！！行け！！」

「は、はいっ」

「おう！わかったぜアニキ！！」

ヴァイスが雷の魔法を打ち込んでマリウスの動きを止める。

俺はその間に金属のカマキリの後ろに回りこんで……

「くたばれっ　！！」

気合一線、思い切り後足の間接部目掛けて剣を横殴りに殴りつけた。金属の擦れる耳障りな音と共に俺の大剣が化け物の後足を捕らえた。折るまでは行かなかったが怪物の後足の片方は

本来想定していない方向にへし曲がった。

「今だ！雪平は離れる！」

ヴァイスが鋭い声で上空を飛ぶ女の子に合図する。

「了解！疾き風よ、我が神の名の下に集いて敵を討つ槌となせ！風打！！」

俺の頬を凄まじい風が颯つた。

眼に見える現象が無く、彼女のセリフから考えると

どうやら彼女の魔法は圧縮した空気の砲弾のようなものを叩きつけるものらしい。

怪物は後ろ足を破壊された所に上方から空気の砲弾を食らい姿勢を崩して倒れた。

「雪平！同時に仕掛ける、縦斬りで胴を折れ！！」

「おおおおおおおつ！！」

渾身の力を込めて怪物の胴を、それすら超えて

地面さえ叩き斬るつもりで俺は大剣を担いで振り下ろした。

マリウスの胴体部の半分以上に大剣が食い込む

ヴァイスのほうは怪物の頭部らしき所に剣を突き入れており……

その自慢の鎌を振るうことなく怪物は一瞬ブルツと震えたかと思うと今までの怪物と同じように体組織の崩壊が始まり

湿った赤茶けた砂を間接部から撒き散らしながら金属の外骨格だけを残した。

正直な話、魔法が足止め程度にしかないこんな強そうな怪物を殆ど何もさせないうちに倒すヴァイスの力量と指示の的確さには驚くばかりだ。

「やっぱアニキすげえな……こんな金属の塊みたいな力マキリの化け物に

どうやったら突きが入るんだよ……」

「おおー！！あんた達バスター？やるじゃん！！」

上空からかけられた声の主の女の子が地上に降りてきた。

そつえば翼の生えた女の子は何なんだろう？

こっちの世界にはこういう種族とかが居るのか？  
俺にはまだまだ分からない事だらけだ。

第九話・天使（後書き）

やっと女の子が出せた……

## 第十話・鳥人族の娘

「あゝしんどかった……」

全くとんでもない初陣になったと思う。

戦闘で慌しかった為じっくりこの少女を見ている暇などなかったから改めてこの翼の生えた少女を見てみた。

白い一对の翼が背中から生えている姿を見ると本当に天使にそっくりだ。

年の頃は俺と同年代くらいか？

白くて滑らかな肌、セミショートの金色の髪は外側に跳ね、パツチリした蒼い瞳。

かわいい、といって差し支えないように思える。

「なんだか慌しくてろくに自己紹介もできなかったわね。

あたしはミルク」

快活に笑いながらミルクと名乗った少女はそういった。

「ヴァイスだ」

「俺は桜田雪平」

「ヴァイスさんにサグラダ・ユキヒラね。

ユキヒラのほうは変わった響きの名前ね……」

人間族で黒髪にダークブラウンの眼ってあんまり見ないし」

ちよつとなまってるぞ、おい、でもまあいいか。

人間族って事はこの世界にはミルクの他にも人の派生みたいな種族が居るのかな。

「さっきは指示に従ってくれて感謝する」

ヴァイスがミルクに礼を言った。

「あー、いいいいいよ。」

初級魔法でも詠唱を省略してあれだけガンガンぶっ放せる時点でヴァイスさん結構な実力者ってことだし……大丈夫？」

「この程度なら問題ない」

ヴァイスは事も無げに言った。

「続きは町に入ってからにするぞ。

とりあえずあの馬車を何とかしないとな」

「あ！そうだ！！依頼者のおっちゃん大丈夫かな？」

ミルクが思い出したように言った。

「馬が足を痛めてたみたいだけど……」

もし馬が骨折とかしてたら俺らだけじゃ

馬車を何とかすることはきついんじゃないかと思つた。

「生きてればなんとかなるわよ。私回復魔法も使えるし」

ミルクがあつさりと言つた。

そういえばこの世界回復と治癒魔法もあるんだよなあ……

「雪平、マリウスの核を拾っておくのも忘れるなよ」

「あいよっ」

マリウスの核は……あつた。

スラのものより一回り大きい緑色の奴だな。

+++++

三十分後、俺たちはタジンの町に帰り着いていた。

ミルクの回復魔法を見たが凄いいもんだな。

蹲って苦しげに嘶いていた馬が暫く淡い光に包まれて居たと思うと直ぐに動けるようになったのだから。

馬車の所有者の商人のおっさんには随分感謝された。

おっおと謝礼の話を切り出す商人のおっさんに

依頼を受けていたわけでもないし勝手にやったことだから必要ないとヴァイスは断つた。

おっさんは随分感激していたように見えた。

戦つて腹も減つたしタジンの町の食堂で食事をする事になったのだが……

「助かつちやつたし食事代くらい奢らせてよ」

と、ミルクが言ったので彼女も着いて来る事になった。

食事はやたらに齒ごたえのあるフランスパンと

こっちで言う鳥と野菜を煮込んだクリームシチューに似ていた。

薄味だが腹が減っていたのでとても美味しく感じる。

「悪いな奢ってもらっちゃって」

「気にしないでいいよ。あの商人のおっちゃんから護衛代もらって  
懐暖かいし」

「もぐもぐ……そういえばさ、気になってただけど」

俺はシチューをかみ締めながらヴァイスに尋ねた。

「冷孔ってワープっつーかレポートっつーか……」

転移つてのが出来るんだろ？何で怪物がうるつく危険な外の道を使  
って馬車を出すんだ？」

「あんたそんなことも知らないの？」

ミルクに思いつきり馬鹿にされたような顔をされる。

「雪平は大部分の記憶を失って森で倒れてたんだ

世間一般の常識を忘れていても仕方有るまい」

ヴァイスがフォローを入れてくれるのが本当にありがたい。

「いや、そうなんだよ……情けない話なんだが」

「あー、そうだったんだ……ごめんね」

「いいよ、知らないのは事実だし」

「雪平の為に説明するが冷孔の転移とは決して万能ではない。  
幾つかの術的、社会的制約が付いている」

「ふんふん」

「雪平も知つての通り冷孔の魔力は多岐に渡って利用されている。

町に怪物を寄せ付けないための防護結界、土壌の活性化、

それに普段の生活の炊事や産業に使用される魔力……

転移というのは転送する質量に比例して

魔力を消費するからその魔力消費は多大なものになる。

町と町の徒歩移動が危険だからといって安易に転移を繰り返せばど  
うなる？」

「あー、なるほど分かったぜ……」

町の結界とか他の部分に魔力を回せなくなるわな。

そりゃ確かに不味い」

「その通り、冷孔から湧く魔力は何れ回復するとはいえ貯蔵している部分を使い切ってしまうえば結界は維持できない。

それに冷孔の転移には世界を巡る地脈の流れの【順路】が存在しどこでも好きなところへ、とは行かない

冷孔の転移が可能なのは大体一週間に一度くらいの頻度だ」

各駅で乗り換えの必要な電車みたいなもんか。

しかも待ち時間が一週間の……

ヴァイスの説明でようやく得心が行った。

「そついう魔法関連の問題もあるんだけどさ」

ミルクは口を挟んだ。

「冷孔の転移つて一部の人しか利用できない所があつてねー

冷孔転移の使用料つてたつかいのよ。物凄く」

「さっき言った冷孔転移の社会的制約だな」

「冷孔転移を使つて一年かけて世界中を巡る大キャラバンや大商人とか

一部の貴族や王族、割引が使えるバスターならともかく……

一般のちつちやな規模の中小の商人は危険を犯してでも街道を行くしかないのよ。

だからバスターを護衛に雇うのが成り立つのよ」

世知辛い話だ。

「良く分かったぜ」

「勿論町の外には怪物も溢れてるし……」

しかも怪物と戦うより人の商人を襲ったほうが楽で手っ取り早いって浅はかな考えを抱いた不心得者で不信心者でクソツタレのごろつきとか

バスター崩れが野盗化して怪物避けの結界を使つて町の外で張ってる事もあるしね」



「ああ、そういう略奪者は斬っても罪にならんからな、覚えておけ」  
「お、おう……」

内容に思わず軽く引いてしまう。

「捕まえて町に連れ帰った所でどうせ奴らを待つのは縛り首だ」

「そういう野盗って奴ら何考えてるかしらね。」

目の前に人の敵、神の敵の怪物が今も町の外をうろついているのに……  
何で善き神はああいう奴らが生きるのを許しているのかしら」

ヴァイスは事も無げに、ミルクは怒りを露にしてそう言った。

やはり価値観の違い、死と危険の近い世界であることを実感する。  
怪物ならともかくやつぱり人を斬るといふのは抵抗がある。

日本の法律に照らし合わせたところでそういう奴らはやつぱり死刑  
だろうし

襲い掛かれたら反撃した殺害した所で正当防衛が成立するだろう。

「……なるようにしかならねえか」

その時は、その時だ。

此処は日本でもなければ甘ったれたぬるま湯の世界でもない。

殺さず、などという理想が実現出来ないだろうという事は分かっている。

そんな神業を行える實力は、俺には今の所無い。

改めて俺は密かに覚悟を固めた。

その状況が訪れたらやるべきことは相手をかわいそうとか

相手にも人生や友人があると思うことじゃない。

そんなのは皆誰だって一緒なのだ。

相手の殺意や恫喝に脅えて筋肉や体を縮こまらせることじゃない。

そういう状況で出来ることなど知れている。

体を動かし、正確に剣を振る。それだけ。

今の俺にはそれしか出来ない。

でもなあ、なるべくならそんなことは無いように願いたいぜ。

## 第十一話・異世界パラダイムの栄光の七柱神

シチューとパンを平らげかけたときミルクが口を開いた。

「そういえばさ、二人ってどの神を信仰してるの？」

「ええ？うーん……」

突然そんなことを聞かれても困る。

日本人は宗教観が薄いのだ。

クリスマスを祝ったり神社や寺に詣でたりもする。

確か家では仏壇があつたから仏教？

浄土真宗だっけなんだっけ……

「宗派の名前が出てこねえ……」

「ええー！！……まさか邪神信仰ってわけじゃないよね」

ミルクに盛大に驚かれた後嫌な顔をされる。

「忘れたのかミルク……雪平は記憶喪失なんだ。

宗派の名前が出てこない、という事は……

以前何かを信仰していたけど忘れてしまったということだろう」

ヴァイスのフォローが本当にありがたい。

どうやらこの世界は非常に宗教の権威が強い世界らしい。

「あ、そういうことね……」

でも神の名まで忘れてしまうというのはほんとに酷いわね。

邪神に呪いでも掛けられたんじゃないと思うくらい。

でも良く良く考えて見れば怪物を進んで倒している

普通のバスターが教義に反する背信者や邪教徒であるはずもないか

……」

本当に俺が邪神に呼ばれてこの世界に来たとするなら……

正直言つて殴りたい。

絶対に殴つてやる。

「バスターって言つても俺はまだ見習いだし」

「ちよつとまつて……神の名前を忘れてるって

「じゃあ雪平は神の加護も無しに怪物に挑んでたの？見習いで？」

ミルクが驚愕したように呟いた。

「そういうことになるな」

「怪物を倒さなきゃ見習いから脱出できないじゃん」

ヴァイスと俺が答える。

「じゃあ何か人間族の魔法で体を強化してたとか……」

「いや、俺魔法自体がよくわからん」

「嘘でしょ……見習い加護なし魔法なし

それで怪物、しかも地上をうろつく怪物の中でも

結構強めなマリウスとの戦いに参加してたなんて……

自殺志願と変わらないというか無知って怖いっていうか……」

ミルクが頭を抱えていたが俺にはまいちピンと来ない。

「まあ、こいつは色々と変わったバスター見習いだな。

良ければ雪平に神の説明をしてやってくれないか？

ヒーラーは神官でもあるしな」

ヴァイスがそう頼むとミルクは心良く頷いた。

「了解、あんたの為に色々と教えてあげるわ。

この世界の栄光の七柱の善き神について」

「よろしく頼むよ。

邪神が怪物を作り出して

邪神が善き神に封印されたって話はヴァイスから聞いたんだけど

詳しい内訳は教えてもらえなかったから……」

「知ってたならもうちょつと詳しく教えてあげなさいよ」

ミルクがヴァイスをにらんだが相変わらずヴァイスのほうは涼しい

顔。

「そのうちやろうとは思っていたが

剣の振り方や怪物を倒す具体的手段やら何やらを教え込むので

忙しかったからな……それに一辺に詰め込んだ所で雪平には多分覚

えられん」

「はあ……ヴァイスさん以外と酷い人ね」

「大本を外さなければ問題なかるう」

「いや問題あるから。細かい不信心はこの際寛容に見逃すわ……」  
「ホン」

いったん咳払いをしてからミルクが切り出した。

「善き神、栄光の七柱神は邪神とその軍勢から全ての種族を守護し戦う力を貸してくれるありがたい神様よ」

彼女の説明によると……

人間族を守護する火と勇気の英雄神フアジーン

鬼人族を守護する雷と歓喜の鬼神サドヴァル

獣人族を守護する土と純粹の獣神アステルトリイ

鳥人族を守護する風と自由の鳥神フィアルヴェトレ

妖精族を守護する木と慈愛の精霊神リヤプラフィロト

竜人族を守護する水と知恵の竜神シェウオースタ

そして全ての神族を統べる光と正義の主神セイルミラシャ

この七柱の神が居るらしい。

「彼らが私達パラダイムに住む全ての種族を見守ってくれてるの」

というかこの世界の名前を初めて聞いた気がするな。

パラダイム、か……

それにここタジンの町じゃ人間族……

多種多様な眼や髪の色をした人を見たことは有っても

他の種族を見たのはミルクが初めてだった気がする。

まあ、背中に羽の生えた鳥人族つてのが居るのなら

他にも異種族が居てもおかしくはないとは思っていたけど。

「具体的には加護つてのはどういうものなんだ？」

俺はミルクに尋ねてみた。

「神様たちに信仰と魔力を捧げることで

主に種族それぞれが持つ特性を高めてくれる奇跡をお授けになるわ」

「永続の能力上昇魔法のようなものだ」

そういったヴァイスをじろりとミルクがにらんだ

「ヴァイスさん、神都でそれ言ったら異端審問官か神殿騎士団がす

っ飛んでくるわよ

神の奇跡を人間の使う魔法と一緒にたにすることは何事か、ってね」

「……以後気をつけよう」

ヴァイスは動じた様子も無くそういった。

「ヴァイスさんはどんな神を信仰してるの？」

私は鳥神フィアルヴェトレの信者だけど」

「……シェウォースタだ。一番性に合う」

「あー。確かに、知性と冷静さを統べるシェウォースタ信者っぽいなあ……」

他の種族の神を信奉してるのは珍しいけど

人間族が竜神族の神を信仰しちやいけないなんて決まりはないし」

基本的には種族に付いた神を信仰するのが一般的というわけか。

「なるほどなあ……」

「雪平君もバスターを続けるつもりなら神の加護を受けたほうが絶対いいって!!」

悪いこと言わないからさ。

教会の神像に魔力を捧げて祈るだけで簡単だし。

大体必須みたいなものだから」

ミルクはそう勧めた。

「そろそろ使えるべきものを使ってもいいか……」

基本的な動きは身についた頃だし

神の加護で底上げされた能力を自らの実力と思って慢心することもあるまい

雪平、神を信仰するかどうかは任せる、好きにしろ」

「わかった、その内行って見ることにするよ

そつえばヴァイス、このさっき倒したスラの核を

登録所みたいな所に持ってけばバスターに成れるんだよな。

小さすぎてダメとか無いよな？」

「登録所ではなくバスターズギルドだな、問題はないはずだ」

「魔法抜き加護抜きで連携してマリウスと戦える実力なら十分よ……」

落ちたら誰がバスターになれるんだか……」

「じゃあ、速く行こうぜ!!」

随分と掛かった気がするがようやくバスターになれるそうだ。

## 第十二話・新しい仲間

食堂での支払いを済ませて

俺とヴァイスとミルクはバスターズギルドに向かっていた。

このタジンの町の建物はみな灰色や黒っぽい色の石で

作られており形は四角くがっしりしている。

テレビで見たヨーロッパやそちらの国の古い町並みを思い起こさせる

地面の道には平たくすべすべした石畳が敷き詰められており

太陽の熱気を受けて酷く暑い。

そういえばこの世界の季節がいまいち良く分からない。

今は夏辺りなのだろうか。

「そういえばミルクも来るのか？」

「護衛の途中で倒した魔物の核を換金したいし」

「どうやらバスターズギルドでは換金もやっているらしい。」

「なるほどなあ」

「雪平は何でバスターになろうと思ったの？」

「何で、って……理由は色々有るけど……」

人を襲う怪物をほっとくわけにもいかないってのもあるし

故郷に帰りたいからだよ。その為には一番バスターが近道だと思っ

たんだ」

「ふうん……ヴァイスさんはどうしてバスターやってるの？」

「俺も雪平と大体同じだ。俺はなんとしても

残り七つの大冷孔を解放して故郷に帰る」

「アニキの言うとおり、どれだけ途方も無いといわれてても

俺たちにはそれしかないもんな」

俺もヴァイスの意見に賛同した。

「じゃあ二人は小冷孔や中冷孔を開放したくらいで止まるつもりは

無いのね!？」

ミルクが妙に熱っぽく尋ねてきた。

「当たり前だろ」

「そこで止まったら何の意味も無い」

ヴァイスと同じく答えを返す。

何故ミルクはそんな事を聞くのだろう。

「大冷孔の解放って全てのバスターの目標で人々の願いじゃないのか？」

「教会の教義でもバスターズギルドの指針でもそうなってるわね。でも現実はそのじゃないのよ。大体のバスターは小冷孔か中冷孔を開放したら

そこで引退しちゃうの」

ミルクはため息混じりにそう答えた。

「なんでまた？」

「それ以上の危険を冒す必要がなくなるからよ。」

小冷孔の解放に成功すれば節約すればの話だけど食べるのには困らなくなるし。

中冷孔の解放に成功すれば確実にお金持ちの仲間入りか貴族の道が開けるわ。

その時点でバスターとして成功になっちゃうから」

この世界で金や名誉を幾ら貰ってもちよっと困る気がする。

一生安泰かもしれないが何の根本的解決にもならない。

そこで諦めたら俺は生きてはいけるかもしれないが……

元の世界にも帰れず、世界から怪物が消えるわけでもない。

隣で泣いてる人が居るのに一人で飯を食っても美味くないだろう。

というか、此処で諦める道を選ぶのなら

俺は最初にヴァイスに助けられた時点で

冒険も戦いも止めて町で細々と生きている。

心押し折られたまま現実を受け入れて

何もかも諦めて生きる道を選択できるほど俺は賢くない。

怪物と戦って死んだ方がいくらかマシな気がする。

「バスターとして成功することなど興味は無いな」



「アニキに同じ！」

これだけは自信を持って言える。

「むむ……二人とも本気で言ってるわね……！！」

これは見つけたかも！！」

「なにを？」

「私がパーティー組んでもいいと思える仲間をよ！！」

「はあ！？マジで言ってるのかよ！？」

俺らの行く道は俺が言うのもなんだけど叶うかどうかすら分からない  
ロマンはあれどただひたすらに危険で厳しい夢追っかける漢の行く  
道だぞ？

付いてこれんのかよ！？」

「志の低いバスターと組むよりはマシよ！

教会の現状にもバスターの現状にもうんざりしてたのよ！！

私は教会を変えて皆が怪物に脅かされない世界を見たいのよ

教義から離れてお布施の多寡と教会内の地位争いに執着する高位神  
官もうんざり。

ヒーラーは何処のバスターにも歓迎されるけど……

大冷孔を開放しようなんてバスターは一人たりとも居なかったわ！！

高位神官連中にも初代教皇様と同じ実績があれば誰にも文句は言わ  
せないわ」

なんというか文字通りの羽の生えてる跳ねっ返りというかお転婆と  
いうか……

「どーするよヴァイスのアニキ？」

「……付いてきたいのなら好きにしろ。

途中で挫けようと俺は知らんがな。

お前たちがどうあろうと俺は一人でもやるつもりだ」

ヴァイスは相変わらず冷淡で端的な口調でそう言った。

まあ、アニキはこういう人だよな……

「俺も諦めるつもりはさらさらないし

ミルクが付いてきたいというなら別にいいんじゃないの？」

「じゃあ決まりね。これからよろしく!!」  
またなんか変わったお転婆娘が増えたなあ。  
そんなことを話しながら俺たちはバスターズギルドに到着した。

### 第十三話・バスターズギルド・前編

「あれがバスターズギルドだ」

ヴァイスが指し示した建物は大体町の中央部に位置し  
広い石段の付いた立派な館だった。

壁は白い漆喰で塗り固められており一目で他の建物との違いが分かる。

「へー、あれがそうか」

何度か見かけていたが行くのは初めてだ。

バスターズギルドの中は白くて清潔だった。

石造りの床は磨き上げられており

それなりの木造のテーブルとイスが置かれている。

大衆食堂や宿屋に置かれている調度品に比べて作り込みが違う。

壁には依頼らしき文字の書き連ねられた羊皮紙が張り出され  
賞金首らしき野盗や怪物の絵が張られている。

中には鎧や武器で武装したバスターらしき人も何人かいた。

テーブルの羊皮紙を忙しく捲っていた受付らしき人物がこちらに気が付いた。

身なりも髪もきちんと手入れされ、薄緑色のガウンを纏って

片眼鏡を身につけた老紳士だ。

「本日はどのようなご用件で？」

「私は換金で」

「俺も換金だな」

「俺はバスター登録に来ました」

「では先ずそちらの神官のお嬢さんからバスターカードと核を出し  
てくだされ」

「はいどうぞ」

ミルクがカードと取り出した小さな皮袋の中身を受付の老人に渡す。  
ビー玉からピンポン玉サイズの色とりどりの怪物の核が

受付のテーブルに置かれた皿に広がる。

老人は置かれた核をモノクル越しに丁寧に観察する。

「ハマレイアにガル、スラ……金貨一枚と銀貨五枚といった所ですね」

受付の老人はテーブルの奥に鎮座する

蒸気機関と水晶玉を合わせたような謎の機械にミルクのカードを置いた。

水晶玉から光が放たれる。

どうやらあの謎の機械でバスターの戦闘記録をカードに焼き付けているらしい。

「さて、こちらがカードと賞金になりますぞ」

老人は丁寧にミルクにカードと渡した。

「どうも」

「では次はそちらの剣士の方……」

ヴァイスは自分の背負っていた大きな袋を空け

そこから一抱えはありそうな皮袋を取り出した。

その大袋と自らのバスターカードを無造作にテーブルに置く。

ゴトツ、とテーブルが揺れ羊皮紙が浮きそうになる。

私物は殆ど無くて中身は全部核かよ！？

受付の老人も目を白黒させている。

ミルクもかなりびっくりしていた。

「こ、これはまた……少々お時間が掛かりますぞ」

「構わん……そうだこのマリウスの核だけは別にしておいてくれ。

二人もこいつの賞金は三等分でいいな？

倒した事をバスターカードにつけたければくれてやってもいい」

「いいよヴァイスのアニキの手柄で。俺一人じゃ無理だったし」

「んー。私もいいかな」

「協力して怪物を狩ったとなると賞金の配分や

誰のバスターカードに討伐記録をつけるかで、もめることも少ないのですがの……」

受付の老人の言うとおり確かにこういうのはもめそうだ。  
あつさりミルクが承諾してくれたのは正直助かる。

「凄いわね……あれだけで一財産よ」

ミルクが感心したように呟いた。

「核を拾うのも手間なんだがバスターカードが失効するのも面倒だ」  
ヴァイスは事も無げというか興味なさげにそう答えた。

「いやはや、これはまた……」

ヴァイスという名前といい銀髪紫眼の容姿といい……

英雄譚に唄われる英雄や勇者に付き従った剣士を思い起こさせます  
な」

「ああー、そういえばそうね」

ミルクと受付の老人はヴァイスの方をまじまじと興味深げに見た。

「ひよつとして縁のお方で？」

そう尋ねる老人に対してヴァイスは無表情で答えた。

「……初代から数えて32代目というだけだ。」

人が呼ぶ血縁にも肩書きにも名誉にも意味は無い」

ばつさりと切り捨てるように、少しうんざりげにヴァイスは言う。

「まさか剣士の子孫に出会えるとは」

「実在したんだ……」

受付の老人とミルクは感心していたようだが  
背景が分からん俺にはさっぱりだ。

「俺にはさっぱり事情が分からん……」

「……俺は話すつもりは無い、聞きたいのならミルクに聞け」

ヴァイスは冷たくそう言った。

「あー、悪いんだけど話してくれるかな？」

「私も詳しく知ってるわけじゃないけど……」

人間族や獣人族には有名なお話のはずよ

かいつまんで話すと大冷孔を人間族の勇者にも獣人族の英雄にもお  
供がいたのよ。

その一人が銀髪紫眼の剣士ヴァイス。

卓越した長剣の剣技と魔法を操って、幾度も彼らの危難を払ったらしいわ。

大冷孔を開放した後、引き止める彼らの制止も聞かず新たな大冷孔を空けるべき者を探す

そう言つて礼も受け取らず去つて行つたらしいわ」

約束された地位も名声も富も……

かつての仲間さえ蹴つてか……

「……それが一族の使命なだけだ」

「やっぱり私の眼には狂いは無かつたわね！」

「ヴァイスのアニキがどんな人だろうと俺は最後まで付いてくよ」

「……好きにしろ」

ヴァイスの顔は相変わらず無表情だ。

アニキは自分のことは殆ど語らないから分からない。

英雄や勇者の仲間の子孫と言つ肩書きが重たくは無かつたのだろうか？

「終わりましたぞ」

どうやら受付の人が核を数え終わったようだ。

「こちらが賞金の金貨三十二枚と銀貨六枚になります」

「すごいのか？」

ミルクを見て尋ねる。

俺はいまいちこちらの貨幣価値が良く分からない。

「バスターじゃない普通の人の月収が金貨二枚から三枚よ

贅沢しなければ一年は遊んで暮らせるわね」

金貨一枚が十万円くらいなら、こっちで言つ三百二十万円くらいか？

「で、こちらがマリウスの賞金金貨三枚になります」

老人から金貨を受け取つたヴァイスは

俺とミルクに金貨を一枚づつ手渡した。

ヴァイスに面倒見てもらった装備やこれまでの金は幾らになっただろつか？

返済も考えなければなあ……

「では次の方どうぞ。そちらの方はバスター登録でしたかな？」

「おう、よろしく頼むぜ！」

色々有ったがこれが俺の第一歩だ。

## 第十四話・バスターズギルド・後編

「では倒した魔物の核を出してください」

「はい」

俺は受付の老人に二つのスラの核を渡した。

「こちらの核はカード作成料として預からせていただきますので  
報償の方は出ない事をご了承ください」

ミルクやヴァイスの出した沢山の核と見比べると小さく少ないが仕方ない。

これからどんどんビックにしていけばいいことだ。

「お名前は？」

「桜田雪平」

「サグラダ・ユキヒラと……」

また訛ってるよ……

こつちの世界の住人はどうしてこう……

「サクラダ」

此処は訂正しておかねば……

「おっと、これは失礼……バスターとしてのスタイルは？」

スタイル？

「雪平は大剣使いだ」

ヴァイスがすかさず補足した。

「でしたらクラスはファイターですな……使用できる魔法や加護の方は？」

「えーと……特にないです」

「神の加護も魔法も無しで怪物を狩ると！？」

受付の老人がびっくりしている。

「……俺が剣技を叩き込んでいる。」

追々魔法や加護はつけようと思っていた所だ」  
ヴァイスが説明した。



「……いやはや、普通のバスターとまるで順序が逆ですな……  
武器と魔法の扱いを覚え、加護を受けてからバスターになるもので  
すが……」

それにしても是非とも最低限加護は受けてから更新に来てくだされ  
加護無しで戦うのは世間的印象の目も戦闘と生存の実利面に関して  
もお勧めできませぬゆえ」

「おう、分かったぜ」

「ではカードを作るゆえ暫くお待ちくだされ」  
思っていたよりずっと緩い。

もっと色々なことを聞かれたり

変な筆記試験やら何やらがあるかと思つてひやひやしていたのだが

……

しばしの後、受付の老人が赤銅色の小さな金属プレートを携えて歸  
つて来た。

「こちらがサクラダ・ユキヒラさんのバスターカードになりますな。  
これはバスターの身分照明証となる金属プレートで

倒した魔物怪物・開けた冷孔の情報が記録される大事なもの。

冷孔を開放したことの無い地上の怪物を退治する者にはブロンズカ  
ード。

小冷孔を開放したものはシルバーカード。

中冷孔を開放したものはゴールドカードが発行されますな。

バスターを支援するため提示することで宿屋、武器、防具、薬店な  
どの各種商店と

冷孔転移時での割引サービスが受けられますが

三ヶ月間魔物・怪物の討伐が無いと失効するので気をつけてくださ  
れ」

そう説明する老人の差し出すカードを受け取った。

「あいよ、ところでさ」

「なんでございましょう？」

「大冷孔を解放した場合のカードって無いの？」

「大冷孔を開いたものは英雄と勇者と初代教皇様以外おりませぬな……」

ゴールドカード以上は存在していないのが現状で……」

「そっか……もしもの為にプラチナ用意しといた方がいいような気もするけどな」

「なるほど……ですがそれはわしの一存で決めるわけにも参りませぬ。」

それとバスターのカードには冷孔を開いたときのための機能が御座います。

鬼人族の呪符魔術の技術を応用して二つの術式を封入してあります。一つは冷孔転移術式。

最も近い地脈の繋がっている開いた冷孔に対して転移門を開くための術式。

もう一つは結界展開術式。

自動的に怪物避けの結界を展開する術式。

どちらも冷孔の魔力を利用するので魔力の心配は要りませぬ。

ただ倒した冷孔の主の核にカードを触れるだけでよいのです」

どちらも便利そうだ。

怪物を倒した後、転移でひとつとびで帰れるのはありがたいしせつかく開いた冷孔にまた新たな怪物が居座られてはたまらない。

「冷孔の主の核？なんか普通の核と違うの？」

「ああ、そういえば説明しておりませんでしたな。」

地上をうろつく魔物や怪物の核とは違い

冷孔の主である怪物の核には

その冷孔から噴出する魔力の流れを制御する力を有しております」

「なるほど、そういえば冷孔の怪物を軍隊とかさ

バスターの大集団作って沢山の人間で叩くことって出来ねえの？」

RPGでは選ばれた勇者としか倒せないってのがお約束だけど別にそんなことにこだわる必要はあんまり無いと思う。

「……それは不可能ですな。冷孔の主は噴出する魔力を使い

魔物避けの結界の逆……人避けの結界を展開しております。

どう頑張っても冷孔の結界範囲には十人しか入れませぬ。

人避けの結界が展開されているうちは外から地脈を繋げて転移することは出来ませぬしの

結束さえさせなければ人間など怪物の敵ではないといわんばかりに

……

それこそが冷孔の解放が進まぬ理由。

それゆえに、冷孔の解放者は自然と一騎当千の兵に限定されるのです」

楽は出来ないってことか……

「十人の強い奴じゃなきゃ冷孔を開けられない、か。

そりゃ時間が掛かるわけだ」

「お分かりいただけましたかな。

それと、最後に一つだけ説明させて頂きますのが冷孔の開放者の権利……

魔力の制御する主の核と土地の所有権利を含めた【アカウント】は他者に売却、譲渡する場合ギルドでの手続きが必要となりますゆえお忘れなきよう」

ああ、そっか……冷孔を開いた直後はそこに誰も住んでないはずだもんな。

主を倒して核を手に入れた奴が土地の所有者になるわけか……  
そりゃ皆躍起になるわけだ。

「大体分かったぜ。ありがとな」

「いえいえ」

これで俺も晴れて見習いが取れてバスターになれたぜ。

「これからどうする？俺はとりあえずその教会つてのを見に行つて加護を受けるかどうか決めたいんだけど皆いいかな？」

「私は賛成ー」

「俺も別に構わん」

「俺は全然知識が足りないからさ、そこでまた詳しく説明してくれ

ると助かるぜ」

「もちろん！私に任せなさい！！」

「教会、か……」

元氣一杯張り切るミルクと氣だるげなヴァイス。

ヴァイスは何時も無表情で冷淡だが今のは特に物憂げに見えた氣がした。

俺の氣のせいかな？

とりあえず次は教会か……どんなところなんだろうな？

## 第十五話・タジンの冷孔

俺たちはバスターズギルドのある商業区から教会のある聖堂区へと向かっていた。

「タジンの町に着て暫く経つけど

こっちの通りには来た事がないなあ」

「そういえばこの町は町の中に冷孔が有るのよね」

「タジンの町はそれなりの広さの平原に偶々中冷孔があつたからな。確か聖堂通りに向かう途中に有るはずだ」

ああ、冷孔って必ずしも平原にあるわけじゃないのか……

「ちようどいいや、見物していこうぜ」

冷孔ってのがどういうものか気になるし。

「まあ行き道だし構わないだろう」

そう言うヴァイスとミルクと一緒に暫く行くとそれらしきものが見えてきた。

「あれが冷孔だ」

「おおーっ」

見た目は小さな円形闘技場コロシウムみたいな感じだ。

町の中に数十メートルくらいの小さな公園くらいの大きさで

地面が円形、緩やかなすり鉢状に窪んでいる。

すり鉢の斜面は石段で整地されており底面は平たい。

底部の平らな場所には赤、紫、青、藍、黄、緑、白七つの石柱が配置され

それから天に向かって七色の光の柱がぼんやりと立ち上る

その周囲をこれまた七色の蛍のような薄ぼんやりとした淡い光の粒が舞っている。

すり鉢の底には石のタイルが敷かれ

その表面には複雑な魔方陣らしきものが刻まれてこれまた光を帯びている。

その他にも金属で出来た太いパイプが底面からすり鉢を上って張り巡らされ

そこからまた地面に潜っている。

近づくとびに明らかに空気が変わった。

涼しくなってくるのだ。

タジンの町の中は太陽が照りつけ暑いのに

この周囲の温度だけが下がっている。

良く見れば石段に座って涼んでいる人の姿もちらほらと見受けられる。

「あの七色の石柱は赤い炎、紫の雷、青の水、藍の空、黄の土、緑の木、白い光を示し

それぞれに神に捧げられているの。」

魔方阵で怪物避けの結界を展開したり町に魔力を流したり……

パイプは氷室に向かって冷気を渡してるのね。

こういう街中に冷孔がある場所は冷気が漏れてるから

暑い時涼みに来る人は風物詩ね」

ミルクが由来やらを説明してくれた。

「町の外で解放されていない冷孔の周辺は

魔力こそ主に吸われている者の冷気は駄々漏れだからな。

季節外れに凍りついている所は冷孔が近くにある可能性が高い」

「へー」

「未発見の冷孔を見つけたが攻略できそうにないときは

その情報をバスターズギルドに買い取ってもらう事も出来る。

基本的に見つけたら開けていくつもりだがな」

ヴァイスがバスターズギルドに報告されていない

未発見の冷孔を見つけたときのコツを教えてくれた。

「ためになるなあ……」

俺は冷孔をまじまじと見つめてみた。

誰かが、俺を見ている気がした。

なんだ……意識が……遠くなる……

「う……気持ち……わりい……」

何で俺、倒れて……

「雪平？」

「雪平……」

目の前に石畳が近づいてくる……

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「何処だよ、此処……」

さっきまでタジンの町中にいたはずなのに……

辺りは暗闇に包まれている。

何もかもあいまいだ。

いかにも現実味が無い。

「何処だよ、此処……」

《扉　　けよ》

「うん？」

誰かが俺に向けて語りかけてくる。

《……開けよ》

お寺の鐘のような不思議な響きだ……

「はぁ！？」

下腹に来る震えを伴う響き。

耳を済ませないと聞こえないような小さな声だ。

《　扉を　開けよ　我、夢……果てにて……待つ》

相手の声が良く聞き取れない。

しかもノイズというか空電雑音のようなのも混じっている。

滅茶苦茶電波の悪い携帯電話みたいだ。

「よく聞こえねえよ……」

「誰なんだよ！！おい！！」

「……」

ノイズが激しくなり、闇がさらに深くなる。

これもパラダイムで過ごしたことも夢だったらしいのに……  
俺は淡い期待を抱いた。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

再び眼を覚ましたときに見たものは俺の部屋ではなく  
悔しい事に石畳の埃っぽい地面だった。

間違いない俺はまだパラダイム世界、タジンの町聖堂区冷孔前に居る。

「おい！！雪平！！」

「大丈夫！？急に倒れたみたいだけど……」

「何でもねえ、戦闘の緊張が解けて疲れが来たのかな……」

それに加えて多分急に温度が変わったから

立ちくらみかなんか起こしたんだと思う」

「今日が初陣だったんだ、無理もない」

「回復魔法掛けようか？教会に行くのはまた明日にする？」

「いや、大丈夫だ、行こうぜ」

何か、大事な事があつた気もしたが、起きてしまつと夢というのはよく覚えていない

曖昧模糊とした物を引きずつて変に心配かけたくない。

第一そういうあやふやな夢を気にするのは俺の性に合わない。

大方立ちくらみ時に見た変な夢に過ぎないだろう。

折角ここまで来たんだし……

休むのは宿に帰ってからでも出来るしな。



## 第十六話・信仰の殿堂

「ほら、教会の聖堂が見えてきたわ！」

ミルクの指差す先を見ると背の高い建物が見える。

「へえ。あれがそうなのか」

近づくにつれ詳細が明らかになってきた。

他の建物に比べて高さが違う。

丸い天蓋の付いた鐘楼はタジンの町での修行中にも

ちらほらとは見えていたが全体を見るのはこれが初めてだ。

大きな丸窓に嵌っているのは

七色の色ガラスで作られた美しいステンドグラス。

そこには七芒星の紋章が描かれている。

全体は大理石のような白い石で出来ており滑らかになるまで磨き上げられている

荘厳といっても差し支えない

行きかう人は皆居住まいを正しており厳肅な雰囲気も感じさせる。

「立派な建物だなあ……」

聖堂の門の前にはミルクと同じデザインの

七芒星の紋章の入った白くゆったりとしたローブと縦長の帽子を被った

人間族の中年女性が箱を提げていた。

「あら冒険者の方々ね。聖堂に入る前に銅貨七枚のご寄付をお願いしますわ」

金とんのかよ……入場料みたいなもんか。

「……連れの分もこれで足りるだろう？」

ヴァイスが大儀そうに物入れから金貨を一枚取り出して

募金箱に放り投げた。

神官のおばさんの顔が途端にニコニコ顔になる。

「あらあらまあまあ。若いのに信仰心がおありなのねえ。」

その貴い喜捨の心はきつと七柱神も厚く貴方達を加護してくださいさるでしょう。

ささ、お連れの方もどうぞお通りくださいな」

入り口を通りすぎて聖堂の門が閉められたとき

ヴァイスが微妙に眉根を顰めていたのは気のせいだろうか？

「太っ腹なのねえ…… お布施に金貨を投げ入れる人を初めて見たわよ」

聖堂の廊下を歩きながらミルクが感心したように呟いた。

「確か金貨一枚って割と大金だったよな……」

おれこのパラダイムの通貨価値つてのがまだ良くわかんないんだけど金貨は分かったけど銅貨や銀貨がいまいち……」

確か…… 概算で金貨一枚が十万円くらい？

「あんたそんな事も忘れちゃったの？

ヴァイスさんの方もそれくらいちゃんと教えてあげなさいよ」

「俺も金は便利だとは思っているが使えればそれでいいから…… それに冷孔の開放を目指すならすぐに金貨くらい稼げるようになってもらわないと困る。」

確か雪平に今まで立て替えた装備代と宿代は端数切捨てで金貨六枚くらいか」

「この人も何気に凄腕のバスター過ぎて金銭感覚がおかしい……」

平然と言い放つヴァイスにミルクが頭を抑えた。

「仕方ないわねえ……」

ざつと説明すると銅貨10枚は銀貨1枚。

銀貨100枚は金貨1枚とそれぞれ同価値で交換が出来るわ。

さつき食堂で食べた一人分の代金が銅貨六枚

ランクにもよるけど宿代の相場が大体一泊銀貨五枚から六枚くらいかしら」

えーと…… 大体……

銅貨1枚＝100円

銀貨1枚＝1000円

金貨1枚＝10万円

こっちで言うこのくらいの価値なのか？

飯が一食銅貨六枚くらいというところ……

さつきヴァイスはお布施という名の入場料700円くらいの所を  
十万円ポンと箱に放り入れたようなもんか。

そりゃさつきのおばさんがホクホク顔になるのも無理はない。

「大体分かったぜ」

「飲み込んでくれたようだなによりだわ、さ、着いたわよ」

俺達は聖堂の中心部に着いた。

聖堂は厳かな雰囲気にも包まれており

七体の神像が配置されている。

あちこちで熱心に祈る人たちの姿が見える。

神官らしき人の説法を聞く人もいれば

中には大理石の床に這い蹲って礼拝する人の姿も見える。

「中央から順に説明するわね」

「よろしく頼むよ」

コホンと軽く咳払いしてからミルクが神像について説明し始めた。

「中央にある神像が光と幸福を司る神セイルミラシャ。

神族全体のまとめ役にして主神様ね。

信者が持つべき美德は正義。

悪を憎み正義を実行する人を好むとされているわ。

招福祈願の祝福をあたえ、厄除祈念の厄払いをしてくれる神様。

怪物と相対するバスターが魔力を捧げて祈れば

成長力以外の全ての基礎能力……

つまり筋力、丈夫さ、素早さ、魔法攻撃力と魔法防御力、知力

その全てをちよつとづつ高めてくれる神様でもあるわ」

光背を背負い厳しい髭面の

まるで王様や皇帝のような威厳を称えた壮年の男性の像だ。

ううん……

「一番左にある神像が火と勇気を司る神ファジーン。人間族を守護する神様ね。」

信者が持つべき美德は努力で、

勇気あり弛まぬ歩みをする人を好むとされているわ。

商売繁盛の祝福を与えてくれる神様でもあるわね。

怪物と相対するバスターが魔力を捧げて祈れば

他の神様と違って祈ってすぐ眼に見える効果は無いけど

技の習熟が早くなったり修行の効率が高まる効果があるとされるわ」

炎を背景に背負った上半身裸で引き締まった筋肉を持つ

腕白そうなので元気一杯の俺と同じ年くらいの少年の像がそれだろう。努力するのを助けてくれる神様か……いいな。

「次にある神像が雷と喜びを司る神サドヴァル。

鬼人族を守護する神様ね。」

信者が持つべき美德は忠義で、

お祭り好きで明るく、与えられた恩を忘れない人を好むとされているわ。

五穀豊穡の祝福を与えてくれる神様でもあるわね。

怪物と相対するバスターが魔力を捧げて祈れば

すぐさま大きく筋力を高めてくれるわ」

雷を背景に背負っていて

額から二本の短い角を生やし

片手かつ笑顔で大きな岩を持ち上げる筋骨隆々の老人像がそれだろう。

筋力かあ……

「次にある神像が土と純粹無垢を司る神アステルトリイ。」

獸人族を守護する神様ね。

信者が持つべき美徳は友情で、

純粹無垢で友情に厚い人を好むとされているわ。

子孫繁栄の祝福を与えてくれる神様でもあるわね。

怪物と相對するバスターが魔力を捧げて祈れば

すぐさま大きく体の強靱さ、丈夫さを高めてくれるわ」

しっかりと鋭い爪を立てて地を掴む

猫の耳と尻尾を持つ、中学生高校生くらいのしなやかで無邪気な少女の像だ。

丈夫さねえ……

「この神像はフィアルヴェトレ様。風と自由を司る神様。私達鳥人族を守護してくれる神様ね。

信者が持つべき美徳は高潔さで、

自由な精神を持ち誇り高い人を好むとされているわ。

無病息災の祝福を与えてくれる神様でもあるわね。

怪物と相對するバスターが魔力を捧げて祈れば

すぐに風のように速く動けるようにしてくれるわ」

風と雲を纏った白い鳥の翼を持つ

美しいがプライドが高く性格のきつそうな成人女性の像だ。

素早さ……

でもどうもこういう大人の女性は苦手だ。

「次にある神像が木と慈愛を司る神リャプファイロト。

妖精族を守護する神様ね。

信者が持つべき美徳は愛情で、

慈愛に溢れやさしい人を好むとされているわ。

恋愛成就の祝福を与えてくれる神様でもあるわね。

怪物と相対するバスターが魔力を捧げて祈れば  
すぐさま自分の魔法の技や威力を高めて  
反対に怪物の魔法からは護ってくれるわ」

木に寄りかかる小柄で透き通る羽を生やした  
ちよつと耳の尖った優しげ、かつ神秘的な若い少女の像がそれだろ  
う。

魔力……よくわかんねえなあ。

「次にある神像が水と冷静さを司る神シェウオースタ。  
竜人族を守護する神様ね。

信者が持つべき美德は知恵で、

冷静沈着で賢く知性の有る人を好むとされているわ。

安寧長寿の祝福を与えてくれる神様でもあるわね。

怪物と相対するバスターが魔力を捧げて祈れば

その人の思考力や記憶力を高めてくれるわ」

波紋の波立つ水面に立った

爬虫類のような瞳、鹿のような角、首や手には鱗。

本を真剣に読む凜とした美形の青年像がそれだろう。

俺が知力を高めても焼け石に水のような気もするけど……

「なるほど……よし！決めた！！」

「どの神様を信仰するか決めたの？」

「俺はファジーンにするわ。人間族の神様だって言うし……それに」  
「それに？」

「熱さに親近感が湧いたんだよ。

火に努力に勇気なんて俺にぴったりじゃねえか」

「あー、うん、雪平なら多分ファジーンにすると考えてたわ……」

「……まあ、妥当な所だろうな」

「それに、すぐになんかくれるってんじゃなくて……  
頑張ったら助けてくれる、頑張る事自体を応援してくれるってのはいいね！」

なんでも神様だより、ってんじゃなくて基本的に自分の力で成し遂げてこそと思うんだよ」

神は自ら助くる者を助く、っていうしな。

「それじゃ、神像の台座に手を触れて祈りを捧げて」

ミルクの言うとおり俺はファジーンの神像に片手を触れた。  
だが祈りを捧げる……というのがよくわからないので

これからよろしくな、見たいな感じで心の中で語りかけた。

……うん、確かに掌を介して体から何か抜け出ていくような感覚はあるが……

これが魔力って奴なのか？

良く分からないし頼ってもいないのでとんとピンとこないが……

そして、何が劇的に変わったというわけでもない。

こればかりは何か練習してみたり修行してみない事には分からないんだらうなあ。

その時、ふっと、熱さのない一瞬だけ幻の炎が俺の周りを包んだかと思うと

一瞬で再び消えた。

「……確かに、神像のほうに魔力は流れたようだな

今は気づかないだろうが成長率上昇の魔法は掛かっている」

ヴァイスが静かに呟いた。

「うん、ちゃんと加護はもらえているはず」

ミルクも賛同した。

「一度加護を貰ったら信仰してる像に魔力を捧げるたびに  
加護は強くなるからねー」。

こまめに祈りと魔力を捧げるのがいいよー」

あ、一回で終わりじゃないんだ。

「ちなみに……加護を全部取ろうと全部の神像に祈っても無駄だ。加護は一番最後に祈った神像の物だけが残される」

ヴァイスが端的に説明した。

「どの善き神を祈ってもいいけれど

加護だけ全部貰おうってのは不信心が過ぎるでしょうよ。

あ、私もフィアルヴェトレ様に祈ってくるー」

ミルクがたたたと自らの崇める神像に走っていった。

「……加護はそれ自体の強化は可能だが重複不可の神聖魔法だから当然だな……」

ヴァイスが静かに、だが他の誰にも聞かれまいと声を落としながら何時ものように端的にそう言って俺の傍を通り過ぎた。

何かを知っている？

相変わらず、アニキは謎めいていて良く分からん。



## 第十七話・タジン平原の怪物を狩ろう

礼拝を終えた俺たちはミルクと一旦別れた。

明日タジンの町の正門で落ち合う事を約束し宿で一泊して初陣の戦闘の疲労を取った。

そして翌朝、また再びタジンの町正門前に集まっていた。

「……これからの行動方針を決めるぞ」

ヴァイスがおもむろに口を開いた。

「今まで通り地上の怪物を狩っていくのか？」

ミルクも加入したし戦闘もまた変わるだろう。

「……暫くはそうなるだろう」

「ま、暫くはそうなるでしょうね。機を見て大冷孔にチャレンジしましょう」

「……その前にまずは小冷孔の解放からだな」

「えー」

頬を膨らませてヴァイスの言動に軽く不満げな様子を見せるミルク。

「雪平にも冷孔の解放という物を見せて、冷孔の主である怪物がどの程度の強さか知っておいてからでも遅くはあるまい。」

いきなり大冷孔は無理だろう」

「そりゃまあ、そうだけどさ……」

ミルクは含む所がある様子だった。

そりゃ俺だつてさつさと大冷孔にチャレンジしたいけど

物事には順序つて物が有ると思う。

自分の強さを過信して突っ走れば待っているのは死だけだと思う。

まあでもバスターの先輩二人が話し合ってる時に俺が口を挟んでいいものか。

「まあいいわ、それじゃこの辺りの怪物を狩り尽くす勢いでいきましょう」

「……そうだな、この辺りの怪物を狩りつくせば暫くは街の人間も

安心して暮らせるか」

「よっしゃー！修行だー！」

ようし、血が滾るぜ！

「張り切るのは良いが俺の言った事を覚えているか？

ブスマンとハマレイアには近づくな」

「確か空飛んでる奴と黒い奴だろ？」

この辺りで地上をうろつく怪物について

ヴァイスに一通り説明は受けているがまだ実物は見た事が無い。

「そうだ。遠距離攻撃の手段を持たない

現在のお前とは相性が致命的過ぎる」

「両方とも私にとってはカモなんだけどね」

「ミルクはマリウスを見かけたら一人で戦おうとするな。

魔法以外に攻撃手段を持っていないと厳しい」

「あー。確かにあいつは苦手だわ」

「では出発するぞ。お互いに着かず離れずの距離を維持して

絶えずお互いを確認して死角を消すように」

そのときの俺は、今日一日が昨日以上に

過酷で辛く、長く感じるようになるなど知る由も無かった。

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

正門を出た俺たちはタジン平原の周囲をうろつく怪物を見つけては  
狩って行った。

「あれがハマレイアだ」

ヴァイスが剣で指し示す先に

平原の空を我が物顔で鱗粉を撒き散らしながら

優雅に舞う巨大な蝶の怪物が居た。

金属のストローじみたグルグル巻きの口吻が禍々しい。

なるほど……確かに。

ヴァイスやミルクみたいに魔法持っていない

俺にとってはこいつは天敵だわ。

空飛べたら大剣が当たる気がしねえ。

「ま、わたしにとっては雑魚もいいところなんだけどね!。」

疾き風よ、我が神の名の下に集いて敵を討つ槌となせ!風打!」

ミルクの風の魔法が素早く練られ、

見えない槌に叩き潰されたように落下した。

「ハマレイア自体の耐久力は全怪物中最弱クラス。

当てさえ出来れば物理、魔法共に有効。

ただし絶対に風下に立つな。

鱗粉には催眠効果がある。

眠った拳句血を吸われて死にたく無ければな」

ヴァイスが説明してくれたのに対してミルクが補足する。

「付け加えるなら眠りが怖いだけで

意外と飛行速度は遅めだしね。

空のフィールドで鳥人族に勝てるわけ無いでしょうが」

二人とも頼もしいなあ……

+++++

「げ、やな奴が……」

ミルクが心底嫌そうに呟き

「うわあああああいたよこれえええええ!」

俺は思わず叫んでいた。

平原を徘徊しているそのいつの姿を見つけたとき俺は一瞬で鳥肌が立った。

今まで見てきた怪物は全部虫系だったから絶対居るとは思ってたけど……

生理的嫌悪感を催さずには居られない姿。

人類絶滅後も生き残ると噂のあれ。

日本の台所や部屋に潜む魔王。

昆虫界の呂布。

出来れば絶対に見たくなかった。

長い二本の触角にぬらぬらと油で黒光りするおぞましい体形。全長二メートルは有るうかという巨大ゴキブリなんて……

「雪平、防御！……雷刃！」

ヴァイスの指示通り大剣を構えて防御の姿勢をとった瞬間怪物目掛けて躊躇い無くヴァイスが魔法をぶつ放した。

雷が奴に直撃したかと思うと……怪物が、爆発した。ドムツ、つという鈍い爆音と共に四散する。

「あれはブスマン。見ての通り、攻撃を受けた瞬間に自爆する。体内に大量の油と可燃性物質を蓄えている所為だ。

至近距離で巻き込まれると手足を吹っ飛ばされるぞ」  
「アブねええええ！！」

「しかもこいつら飛ぶのよ……短距離低空飛行だけど……多分一番バスターに嫌われてる怪物じゃないかしら……」

「心の底から同意するぜ……」

「げんなりしているミルクに同意の念を俺は示した。

「雷刃、雷刃、雷刃」

相変わらずヴァイスが顔色1つ変えずに魔法を連打すると周囲の背の高い草に覆われた場所で次々に爆発が起こった。

「しかも、群れる」

「一匹見たら三十匹って言うけどマジ勘弁してくれよ……」

でもこいつに大剣を叩き込むことが無く正直ほっとしている。

……それから俺たちは、ひたすらに怪物を見つけては狩って行った。

## 第十八話・遙かに遠い怪物の居ない世界

俺とヴァイスとミルクは体力が許す限り  
平原の怪物を狩り続ける。

一体何匹の怪物を狩っただろうか？

時計がないので時間の感覚が酷くあやふやだ。

確か朝からやっていて

昇ってきた太陽が直上付近にまで来ている

この世界の一日が俺たちの地球と

同じという保障は何処にもないが……

三時間？いや四時間くらいか……？

タジンの町に居れば教会の鐘の音が

一応の時間の区切りを知らせてくれるのだが……

俺が狩れるだけのスラを狩り、マリウスは後足を斬って行動を止める。

飛べるミルクは飛行系の怪物蝶ハレマイアを狩る。

ヴァイスは主に自爆するブスマンが俺たちに近寄る前に雷撃の魔法を浴びせ……

時には俺やミルクのサポートに入っている。

「ぜえ……ぜえ……」

いちいち核を拾うのすら億劫だ。

また一匹、スラが地面を削りながら俺のほうに突撃してくる。

タイミングよく回避に移る動作、構える動作、剣を横振りに振るう動作。

それがテンポ良く繋がり、回避と同時に大剣を振りかぶりスラをカウンター気味に斬り捨てるという結果を作り出す。

それら一連の流れに無駄が少なく、素早く移れるようになった気がする。

身体能力自体はそう変わった気がしないのだが

覚える一つ一つの動きのキレがあがったというか

最適な動作のコツを掴みやすくなった気がするというか……

確かに体が技の動きを覚える事が速くなっている。

なるほど、これが加護か……

「確かにこいつは便利だぜっ!!」

思わず頬が上がってしまふ事を自覚する。

自分が頑張れば確かに強くなれるというのは面白い。

しかし……

「なあミルク！俺たち何匹くらい怪物を狩ったっけ!？」

上空を舞うミルクに声を掛ける。

「はあはあ……知らないわよっ!!」

ミルクの疲労もかなり濃い。

動き続けた俺も全身から滝のような汗が吹き出ている。

手の握力は殆ど残っていない。

手首はイカれる寸前、腕の筋肉はパンパンにふくらみ

大剣を持つだけで鈍痛が、振るえば即座に激痛が走る。

平原を走り続けたせいで足も膝が笑っているのを自覚する。

「……ふむ」

手近なスラの甲殻の隙間に剣を通していた

ヴァイスが動きを止めてこちらを見た。

「今日はこの辺りにしておくか……核を拾ってタジンに帰るぞ」

息一つ、汗一筋掻いていない。

俺以上に剣を振るミルク以上に魔法をぶっ放していた筈なのに……

この人本当に人間かよ!!

「お、おう……」

「翼が重い……喉が哽れそう……」

何とか気力を振り絞って核を拾い集め

タジンの門に入ったときにはもうへとへとに疲れ果てていた。

俺と地べたに大の字になって空を仰ぎ

ミルクは門の近くにあった木製ベンチで座り込んでいる。

「こんなハイペースで狩りをしたことなんてないわよ……」

首を傾けてミルクを見るとぐったりと力なく頭を垂れている。

ヴァイスは拾ってきた核を数えているようだ

「スラが四十二匹、ハマレイアが二十八匹

ブスマンが三十六匹、マリウスが三匹か……」

色とりどりの怪物の核を前に

思案顔でポツリとヴァイスが呟いた。

「タジン平原の怪物を全滅させるには遠いな」

この人本気でタジン平原の怪物を全滅させるつもりだったのかよ！

「アニキやつぱり半端じゃないなあ……」

「冷孔の開放と怪物の殲滅だけを目的とする

伝説の剣士の子孫って聞いたけど案外本当かもね……

こんなペースで怪物を狩るバスターってまず居ないわ……」

力量的な意味で言ってるのかな？

「そうなのか？自分の持つてる力に合わせて

狩れるだけ怪物を狩るのがバスターだと思ってたんだけど」

「今日一日の戦果は先ず一般的なバスターのものじゃないわね。

教会の教義でも怪物を倒す事は推奨されてるけど

実際の所は一度にこんなに沢山狩れる力量がないのもそうだし……

実際にバスターは命掛かって危険と隣合わせだからね。

ちよつと怪物を倒せば暫くは生きていける報酬が手に入れられるから

ダラダラスローペースで狩る奴が大多数なのよ」

「……普通のバスターと同じ事をやっていて

大冷孔の開放など出来るわけが無いだろう」

ヴァイスは相変わらず数え終わった核を仕舞うと

相変わらず端的にそう言った。

「そりゃ、もつともだな……」

なるほど、道理だと思う。

皆と同じくらいの事をやっていたら皆と同じだけしか成長できない。

「……今日のところは体を休めておこう。」

明日もまた同じ事をするからな。

雪平は食事の後午後から武器防具の手入れを教えてやる」

「明日もこれやるのか……」

「ごめん私このパーティちよつと舐めてたわ……  
着いていけるのかしら……」

それなりにバスターの経験があるであろう

ミルクが着いていけるか不安になっている。

力量に開きの有る俺は追いつくためにはまだ全然足りない。

「大冷孔を開けたきややるしかねえだろ」

命の危険があることもキツイ事もあるのは分かりきっている。

こんな所で挫けてたまるか。

俺は自分を奮い立たせ、暗示を掛けるように

やるしかない事を自分に言い聞かせた。



## 第十九話・魔法の行方

あれから一週間、俺たちはタジン平原の魔物を狩り続けた。体も大分戦闘に慣れてきたような気がするが

ヴァイスは俺たちの成長に合わせて

その度に狩りの継続時間が延ばすので

強くなっている事を実感する反面ちつとも楽になった気がしない。

今日は天候が悪い事と、体を休める休養という事で狩りは休みだ。

ミルクは自分の部屋で爆睡しているらしい。

俺は宿で武具の手入れをしていた。

バスターが泊まる事が多いともあって

一応武具の手入れを出来るような一角が備え付けられているのが嬉しい。

油を含ませた布で鎧の金属部分を磨いて錆を浮かないようにし皮の部分は乾いた布で丁寧に擦って泥や汚れを落とす。

鎧の留め金が壊れていないか

皮ベルトが切れそうになっていないかチェックする。

大剣の方も砥石を当てて油を塗り、羊毛で磨き上げる。

「この皮鎧や大剣にも大分慣れてきたな……」

思わずそんな事を呟きながら自らの掌を見る。

剣を握る指の付け根にはごつい剣ダコが幾つもある。

肉刺が出来ては潰れ出来ては潰れた結果だ。

「魔法とかも使えるようになった方がいいのかね」

自分だけ遠距離攻撃の手段が無いのがかなりキツイ。

空飛ぶ怪物や遠距離の攻撃手段を持たないと

倒せないような怪物も居るのだ。

「俺にも覚えられるかな……」

自慢じゃないが俺は余り頭の良い方ではない。

どちらかといえば体を動かすほうが得意だ。

手足を使った事なら何でも出来そうな自信があるが

複雑な詠唱や手順を覚えるとなると大変な事が容易に想像がつく。  
しかし頭を使う事が苦手だからといって

ヴァイスやミルクに頼りっぱなしでいいのか？

これから先の戦いは魔法が使えるようになっていたほうが  
絶対に良いに決まっている。

「石に噛り付いてでも出来るまで取り組むって事を

決めておいたほうがよさそうだな」

そうと決まれば俺は魔法についてヴァイスに聞いてみる事にした。

「……魔法を覚えたい、と」

「そうなんだよ、何時までも使えないままにしておくのも不味いと思つてさ」

宿の部屋で休んでいたヴァイスにそう尋ねると

彼は難しそうな顔をした。

「……既に雪平には二つの魔法が掛かっている」

「二つ？」

「一つは神聖魔法の加護だという事は分かるが……もう一つが分かるん。

パラダイムには種族事に幾つもの魔法系統が存在するが……

既存のどの魔法系統にも当てはまらない魔法を既にお前は使っている」

俺が既に魔法を使っている？

「全然自覚が無いんだけど」

「だろうな……というか初めてお前に出会ったときから

お前はその魔法を使っていた」

「うつん……」

さっぱり実感が湧かない。

一体俺がどんな魔法を使っているって言うんだ。

「だから俺は雪平に魔法を覚えさせる事を躊躇っていた。

冷孔から吹き出る魔力のサポートも無しに  
魔法を使えば精神力と生命力を削るという事は話したな？」

「ああ、聞いた気がするぜ」

「神聖魔法である加護は永続で効果が持続するからともかくとして  
謎の魔法を使つたまま他の魔法を覚えさせると

一気に生命力を損失しかねないからな……」

なんだか凄く哀しい気分になった。

「じゃあ俺は魔法を使えないのかな？」

「いや、手は有る」

「どんな手なんだ！？」

「小冷孔を開けてみて、まだ使用されていないその魔力に雪平を馴  
染ませてみようと思う。」

冷孔を開放して、その魔力を浴びればバスターが溜め込める最大魔  
力の器も広がる。

そうすれば謎の魔法を使つていたとしても恐らく余力が出来るはず  
だ」

冷孔を開放するとそういう恩恵も有るのか……

「タジンの町のじゃだめなのか？」

「中冷孔とはいえ大半が結界やら生活基盤に使われているからな……  
時間が掛かりすぎるし効果は薄いだろう」

「なるほど……」

「雪平も怪物との戦いに慣れてきたし

そろそろ小冷孔の怪物と相対する頃合かもしれん」

……俺が魔法を使えるようになるためには

先ず小冷穴を開けなきゃいけないようだ。

## 第二十話・小冷孔への道

翌日……天気は快晴。

白い雲、青い空……遠出をするのには絶好の日和だ。

俺とヴァイスとミルクは何時ものようにタジンの門の前に集まっていた。

ミルクにも今日は小冷孔を開けに行く事を話してある。

「昨日説明したとおり、今日は小冷孔を開けに行く」

「おう！」

小冷孔の怪物は強いと聞くが……

やっとこの時が来たかと思うと

緊張もするが同時にワクワクする。

「……はい」

ミルクはあまり乗り気ではないようだ。

「さっさと済ませちゃいましょうよ」

ミルクはなんとか面倒そうだ。

この弛緩した雰囲気はなんだか不味い気がする。

「いやそりゃミルクは慣れてるかもしれないけど……」

俺は冷孔の主の怪物と闘い合うのは初めてだし……

ミルクも……あんまりダレてると思わぬ怪我をするんじゃない……」

ミルクはむっとした顔で

「あんたに言われなくてもそんな事分かってるわよ。

猪突猛進以外能の無さそうなあんたが臆病風に吹かれてどうすんのよ。

前衛がしつかりしてれば小冷穴の主くらい楽勝楽勝。

あたしとしてはあんたが緊張しすぎて縮こまったりビビって動けなくなる事のほうが心配だわ」

……くっそっく何もそこまで言わなくても……

未知の強敵に警戒して何が悪いって言うんだよ。

前衛だつて只力任せに剣を振つてりやいいってもんじゃないんだぞ

……

「俺はただ……」

「そこまでだ……いいか二人とも良く聞け」

ヴァイスの冷たくて平坦な声が俺とミルクとの間に割り込んだ。

「必要以上の緊張も油断も不要だ。」

雪平、指示に従つてこれまでの訓練や戦闘通り何時ものように動け。怪物の動きから目を離さない事は大事だが……

余計なことは考えるな……いや、思うなと言つた方が正しいな」

「余計な事つて？」

「戦術、戦略、戦闘行動以外の全てだ……

勝てるかも、勝てないかも……怒り、過度な高揚、心配……

驚き、迷い、疑い、不安、緊張、臆病、蛮勇、驕り……

全て邪魔だ……そんな事を思えば思うほど剣は鈍る。

他に注意を払うべき事は幾らでも有る。

味方の位置、陣形、敵の一挙手一投足……

自分の肉体の状態の把握、技の組み立て……

こんなにも考えるべき事があるのに、派手な心の動きは邪魔にしか  
ならん」

平常心が大事つて事か……

これは肝に銘じとかなきゃなあ……

「……ミルクには確か小冷孔の開放経験もあつたな？」

「まあね」

ミルクはちよつと得意げにそう言ったが

ヴァイスの声色はまだ冷たい。

というか……何時もより険がある気がする。

「前衛は後衛を守る事が仕事と言つのはもっともだ。

俺も可能な限り攻撃を防ごうとは思つ。

だが実戦では何が起こるか分からん。

流れ弾が飛んでくことも有る。

ましてや雪平は経験が浅い。

なお更にサポートに注意を払う必要があるとは思わないか？」

「そりゃ……そうだけどさ……わかりました、がんばりますよ」  
ミルクはちよつと頬を膨らませてふてくされた顔をした。

「ふう……」

ヴァイスは小さくため息を付いてそれ以上は何も言わなかった。

ミルクが俺のほうに向けた瞳に侮りの色が伺える。

あ、この目は良く分かる。

こいつ使えねえな、って思ってる奴の目だ。

なんだかなあ……なんだろこの嫌な胸のムカつきは。

確かにミルクはバスターとしては先輩だろうさ。

だからって全部自分中心に世の中が回ってる訳じゃないだろ。

守られるのが当たり前、なんて態度されたら守る気なくすっつの。

まったく女って奴は自分勝手な……

とは思うものだからといって俺は小学生のガキじゃねえ。

これから怪物とやりあうってのに些細な感情を気にして

自分の役目を果たさないのはもつとダメだ。

ちよつとタカビーな態度にちよつと嫌気が差したからってそれは無い。

これで怪物の攻撃が後衛に届かせた日には……

ミルクの俺に対する使えない奴呼ばわりが

加速するのが眼に見えているがそれはまだマシだ。

怪物に容赦なんか無い。

一週間も生き死にのやり取りをやってれば掴める物も有る。

あいつらはヴァイスが生き物ではないといったが……

昆虫みたいな無機質な見た目もそうだが

怪物は本当に文字通りの意味で殺人マシン、殺人機械に思える。

攻撃すればその衝撃で仰け反る事はあっても

逃げることは絶対ない。

本当の生き物の虫は死にそうになったり殺虫スプレーを掛けられた

ら必死で逃げる。

生き物の生存本能に防衛本能というものがあるから。

あいつら怪物はただこちら側を殺しに来る。

だから、守れなかった時……

運が悪い最悪の場合は……

本当に【目も当てられない】事になる。

昔日本の学校の授業で見た交通安全と交通ルールの遵守を促す映画。  
交通事故のイメージ映像がふつと脳裏をよぎった。

……ああなる……一歩間違えれば俺たち全員。

「ん、んっ！」

慌ててその映像を振り払う。

「ほんとそんなんで大丈夫？」

「……うるせー武者震いだよ！」

自分で言っていてあんまり力が無かったと思う。

身も凍る戦慄はヤバイ、不味い！

こんな事考えてたら間違はなく実戦で地面に足が居付いて固まる……！

そのことよりはミルクの舐めた目線を改めさせる事を考えたほうが

よさそうだ……

どうしてくれよう……

味方に当たるわけにも行かないなら……

このモヤモヤは怪物にぶつけるしかないな……！

そうだよ、怪物に勝ちさえすれば恐怖も消える。

ぶっ倒した怪物には俺達を傷付ける事も殺す事も出来ない！

ミルクの侮りも消える！

俺に対する評価を改めさせる事に繋がる！

なんだ、簡単な事じゃねえか……

ヴァイスのアニキの言うとおり戦闘には平常心……

となれば、脅えたりブルつたり怒ったりしてる暇があれば

大剣をちゃんと振るえる様イメージトレーニングでもしといった方が  
いいな……

そっちのほう<sup>が</sup>建設的だ……

「脅えてるかと思えば獣っぽく笑ったり変な奴ね」

あれ、俺笑ってたっけ？

まあいいや。着く前に体が動くように……

横斬り……縦斬り……ダッシュからの一撃……

相手がこう来たらこう避けて……



## 第二十一話・バスターの裏技・怪物の核と結界

俺とヴァイスとミルクは小冷孔の開放を目指すべく  
タジンの町を出て北に向かって歩いていた。

相変わらず天気は快晴。

背の高い草やところどころに茂る幾つもの灌木の間を  
踏み分けながら俺達は進んだ。

「あー、翼が小枝に引っかかるー……」

ミルクがブツブツ呟いている。

空を飛べて便利だけどこういう地上を進むときは不便そうだ。

「一人だけ先行するわけにも行かないだろ？」

野営用の荷物は俺とアニキが持つてるんだし」

俺もヴァイスも前日準備した荷物を皮袋に入れて背負っている。

ヴァイスは先頭に立ってしきりに周囲を警戒している。

「余り騒がしくするな……小冷孔に付くまで無駄な魔力と体力の損  
耗は避けたい。」

バスターズギルドから買い取った小冷孔の情報によると  
たどり着くまでには一日半は掛かるからな……」

結構な長い道のりだ。

「でも帰りが冷孔転移で一瞬つてのはありがてえなあ……」

冷孔転移のシステム上怪物の居る所には転移できないが  
倒してしまえばええすればワープで一気に帰ることが出来るのはすこ  
い便利さだ。

怪物との戦いでくたくたになった所を歩いて帰るのは考えるだけで  
も億劫だ。

「あ、そういえばヴァイスのアニキ

怪物避けの結界を作る楔みたいなのもつてたじゃん。

あれって使えないのかな？」

「あー、そういえば雪平は怪物避けの結界の仕組みを知らなかった

わね」

ミルクがやれやれといった感じの声で呟いた。

「結界の仕組み上移動しながら使うのは難しいのよ」

「……怪物避けの結界は基本的に設置型で冷孔から常時供給される魔力が前提なんだ」

ヴァイスの話をミルクが補足する。

「そ。結界を展開している間中ずっと魔力を使うからね。

楔形魔道具に充填されている魔力を使い切ったらそれでおしまいなのよ。

効力は大体半日くらいね」

「なるほど……今歩いている最中に結界使ったら野営できなくなるもんな」

そつという問題があるのか……

「あ、だったらさ。沢山【楔】を持ち歩いて各人持ち歩いてつてのはダメなのか？」

「それもちよつと難しいのよねえ……」

「さつき設置型だと言っただろう？」

結界は術式を刻んだ楔形魔道具の線を結んだ範囲を怪物から守る。手に持った所で動きが激しすぎれば線は乱れて効力がかなり下がる。自分は含まれないから余り意味は無い」

「綺麗な直線が結べないと上手く結界を創れないわけか」

納得した。上手くはいかないなあ……

早々簡単に楽は出来ないってことか。

「そついうことね。意外と融通が利かないのよ。

地面に刺すなりなんなりして何かに楔を固定しないと術式が安定しなくてね……

詠唱や魔道具を使って自力で結界を展開した所で

冷孔の補助を受けていない所ではどんどん体力と精神力を奪われていくわ。

現実的じゃないわね」

ミルクはやれやれという感じで両手を挙げる。

「雪平も怪物に襲われる馬車見たでしょ？」

馬車の柱や部分部分にも楔形魔道具は埋め込まれてるんだけど封入されてる魔力が尽きればそれまでだし

マリウスみたいにしつつこい魔物に見つかるやバイし」

「なるほど……万能じゃないんだなあ。」

そういえば、どうやって道具に魔力を封印してるんだ？」

「あんたも良く知ってるものを使ってるわ。」

怪物の核は魔力を蓄える性質があるのよ。

一体の怪物に一個しかないから討伐記録にもなるし

そして換金対象になるのは知ってるだろうけど

魔力をためれる宝石だから魔道具の材料として需要があるわ」

「へー！怪物の核にはそういうことにも使えるんだ！！」

綺麗なだけの宝石じゃなかったんだ。

「……核は怪物の魔力の源、動力源で心臓部だ。」

これを破壊、及び抜き取れば大抵の怪物は倒せる」

「壊すのは勿体無いし大抵怪物の体の奥深くにあって狙えないし

全くお金にならないから普通やらないけどね。

お金目当てでやってるわけじゃないけどやっぱり旅には色々と入用

だし……」

「行き道がてら核の詳しい説明とそれを使ったバスターの裏技について説明してやる」

何かの役に立つかも知れないしな、とヴァイスは言った。

「よろしく願います」

役に立つ事なら何でも聞いておきたい。

「バスターの裏技？」

ミルクは怪訝そうな表情だ。

「俺の知る限り核は特定の魔力波長を持つ、物質化し安定した魔力の塊だ」

ヴァイスが説明し始めた。

「物理的な作用で破壊してもただ砕けるだけだが……」

「ふんふん……」

「核が吸収してる魔力の量よりも多い魔力での魔法攻撃を行ったり上位魔術を核に与えると話は別だ」

「そうするとどうなるんだ？爆発とかすんのか？」

魔力の塊に強い攻撃魔法をぶつけると多分そんな事になると思っけど……

「おおむね正解だ雪平。魔術的な衝撃を受けて核の魔力が一気に開放される」

「へー！それがバスターの裏技なんだ……始めて聞いたなあ」

ミルクが感心したように呟いた。

「バスター中級者や魔法の専門家なら知っている人間も居るだろう。開放された核の魔力は与えられた攻撃魔法の方向性に引きずられるから

核の種類によつては魔法の威力を倍に高める事も可能だ。

無論そういう使い方をすれば核は粉々に砕けて使用不能になるがな。そうでなくても核をこつという風に使うと暴発の危険もある」

「確かにそれは裏技ね……核をこつという風に使えば

魔法の威力を高められるって分かっていても普通勿体無くて出来ないもの。

よつぽど裕福か、楽に怪物を狩れる腕前がないと……」

ミルクは何か考え込んでいるようだ。

「今のは攻撃に使う場合だが防御にも使用できる。

こつちのほうで難易度が高いがな。

魔法を使う怪物のタイミングと角度を図って核を投げてやる事で怪物の魔法をあらぬ方向に誤爆させたり……

あるいは目標の手前で暴発させてやる事で身を守ることもある」

「それはまた……一歩間違えば自爆寸前の荒業ね……」

「下手打てば怪物の魔法を強化するだけで終わりがねないよなそりゃ……」

「……怪物の核の魔力は強固に物質化している所為で基本的には専用の魔道具を使わないと魔力を出し入れできない」

「ああ、それは私も不便に思った事有るわー。」

核の魔力がちよこつと自由に使えたり引き出せたりしたらなあーって普通に握って魔法使っても核の中の魔力はビクとも動かないのよね」

「それは波長が違ったためだ。」

態々町に魔力注入や取り出し用の巨大な魔道具があるのは安全のためだろうな」

ああ、街中に有る大きい機械ってそのための物なんだ……

冷孔の魔力を核に入れて充電したり

逆に魔力を核から取り出したり……

「核の魔力を自在に出し入れして自らの魔力を補充できるのは魔法専門に特化したソーサラーのクラスだけだ。」

魔道具も使わず戦闘中にそれが出来る熟達の魔導師となるとさらに数は少なくなる」

「そういえばソーサラーってそんな事も出来るのね」

「なるほど……今回の話も為になつたぜ」

「いざというときには核を使って強力な一撃をすることをお勧めする。」

出し惜しみをして命を落とす事になったら元も子もない。生きてこそ、だ」

俺達は道中そんな会話をしながら小冷孔への道のりを進んでいく……

…

## 第二十二話・小冷孔の戦い・前編

タジン平原は広い。

現在の進行方向である山脈で視界が遮られる北側はともかく東側には地平線が見えるくらいに広かった。

日本では地平線が見えるような場所は北海道くらいにしかない。殆どが人工的な建物で視界が遮られて国内で地平線を見る事は難しい。

東側に地平線が見えるということはあそこから……

最低でも数十キロ相当な距離が離れているはずだ。

俺達は楔形の簡易結界の中で野営して一夜を過ごし……北に歩く事さらに半日。

ようやく目的地が見えてきた。

草原の中に広がる円形の凍てついた地面。

管理されていない冷孔の冷気は

冷孔本体の大きさに比べて遠くまで広がるんだな……

照りつける日差しは強いのに

吹き付ける風は冷たくなっている。

タジンの町の中冷孔と比べると小さい範囲だがその中心は僅かに窪み中心に大きな怪物が居る事が分かる。

取り巻くように見慣れない魔物も見かける。

「うるつく怪物が変わってきたな……」

スラやマリウスやハマレイアは余り見かけなくなった。

変わりに芋虫のような怪物が多く、少数の蜂の様な怪物がうるついている。

「冷孔の又シのテリトリーが丁度

人間の出入りを制限する人数制限の結界の範囲内になってるのよ。

冷孔周囲では棲む怪物が違ってくる事も多いしね」

「飛んでる針の有る怪物がファブリだ」

体長は五十センチくらいだが  
それと同じくらいの長さを持つ

もはや針というよりは槍やレイピアにそっくりの尾針をもつ巨大蜂  
をヴァイスが指し示す。

「……毒をもつ尾針も脅威だが何より厄介なのは  
あいつは特定のルートを巡回し、敵を発見すると音を鳴らして仲間  
を呼ぶ。」

だが上手く避ければ無駄な消耗をせずに主にたどり着ける」

「うげえ、仲間を呼ぶのか……」

「怪物に連携されると死が見えるからな」

「ファブリの群れに襲われて全滅した商隊やバスターチームの話も  
たまに聞くわね」

ミルクもさらっと恐ろしい事を言う。

怪物はどいつもこいつも厄介な性質を持ち合わせてるなあ……  
あいつらが集団で襲い掛かってくると槍の雨が降ってくる自体もあ  
りえるわけか。

……ああ。槍の雨が降るって言葉現実ではありえない事  
だって諺のはずだけど、実際にこのパラダイム世界ではありえそう  
だな……

「暫くは此処で様子を見るぞ」

低周波を伴うかなりうるさい羽音が行きつ戻りつしている。  
身を潜めながら待っていると

巨大蜂ファブりが遠くに離れていこうとしている。

「お、離れてくぞ」

「此処は本来ファブリのテリトリーではないからだ。  
他の冷孔の様子を見に來ただけだ」

「あー。小冷孔のヌシがナナだったら

警護すべき冷孔から離れるなんて事はないわね」

「ナナが相手だと今の雪平では向かないだろう」

「それもそうね」

「どういうことだ？」

「えーとね、ファブリは本来ナナっていう小冷孔の又シに統率されているの。」

ナナの見た目はファブリを太らせて何倍にも大きくした感じね」

「空を飛ぶナナとファブリの群れは雪平には相性が悪すぎる」

察するに、女王蜂と働き蜂、みたいなもんか。

確かに飛ぶ相手は大剣しか攻撃手段が無い

今の俺にとっては天敵過ぎる。

「バスターズギルドから買った情報によると

この小冷孔の又シはドミンで取り巻きはガルだからな」

「それなら大丈夫そうね」

「ガルってのはあの大芋虫かよ？なんか厄介な攻撃してくるのか？」

「動きは鈍いし他の魔物に比べて体は柔らかいが

土の魔法を使う。視界は狭いから正面に立たなければ問題ない」

「わかった」

「それでは始めるぞ、先ずは取り巻きを片付ける！」

「おう！！」

俺とヴァイスとミルクは飛び出した。

俺も手近にいた全長二メートル、体高一メートルは有る

大芋虫の側面から駆け寄り大剣を振るう。

「おおおおらあー！！」

気合一閃、横薙ぎに払った剣が芋虫の胴体を斬る。

剣は余裕で通る……確かに他の怪物と比べて脆いし遅い。

分厚いゴムを斬ったような感触だ。

生理的嫌悪感さえ我慢できればたいした相手ではない。

「ほらほら、こっちこっちー！」

あちら側にいる飛べるミルクなどは超余裕そうだ。

魔法発動前のかすかな唸りが聞こえた気がした。

ガルの手前の地面が盛り上がり、地中から鋭く尖った岩と石が飛び出す……



あれがヴァイスが言っていたガルの魔法か……

確かにあんなもんまともに喰らったら大怪我間違いなしだが……  
からかうように宙を舞い遊ぶミルクには全く当たっていない。

華麗に回避している。

「そんなトロイ魔法当たるもんですか!!」

ガルは柔らかすぎて風打はそんなに効果が無いから……」

魔力と風がミルクの周囲に集う。

「速き風よ、我が神の名の下に集いて敵を討つ刃となせ! 風刃!!」

風の刃が大芋虫の怪物を切り刻む。

ヴァイスは……

「アニキの方は心配するまでも無いよな……」

ふと視線を向けると、ヴァイスのほうは戦闘というよりは作業だった。

彼は一言も発せず流れるように駆け寄り、すれ違いざまに頭部を一突き。

魔法など使うまでもないとも言いかのように。

疾走し、すれ違いざまに刺し、また次の獲物へ向かう。

中には最短距離の怪物の正面から行き、

怪物の魔法が発動する直前には頭部を刺していた。

1秒前までヴァイスが居た位置に一拍遅れて土の魔法が炸裂した。

「俺も出来る事を頑張るか……!!」

二人に遅れをとり続けるわけにも行かない。

俺は再度大剣の柄を握り締めると取り巻きの怪物に向かって駆け出した。

## 第二十三話・小冷孔の戦い・中編

俺達は冷たい大気の戦場を駆け抜ける。

「これで……！残りはボスだけだ！！」

俺は大上段に振りかぶった大剣を

思い切り力を込めて振り下ろす。

大芋虫の怪物ガルは胴を半ばから切断される。

程なくして死んだ怪物の体液も組織も赤茶けた砂に変わる。

残るのは小さな薄黄色の核だけだ。

皆の活躍もあつて取り巻きは大体片付けた。

「しかし……あれが相手かよ……」

取り巻きの怪物がやられてると言うのに

小冷孔に陣取って動かないそれは……

一言で言うなら大型トラックくらいはありそうなクワガタムシだった。

俺の持つ大剣が小さく見える凶悪な二本の大顎。

しかも磨いた刃物の様に鋭利さを備え

異形のはさみの様に交差して閉じたり開いたりしている。

挟まれたら鎧を着けていようが関係ない。

間違はなく上半身と下半身が泣き別れる。

それどころか電柱だろうが家屋だろうが真つ二つにしそつだ。

「で、どーすんだよ？」

「正面は俺が行こう。」

ドミンの大アギトは非常に広い前方攻撃範囲を持つが死角が無い事はない」

躊躇い無くヴァイスは一番危険な場所を選択した。

「俺はマリウスの時と同じで脚を叩き切ればいいんだな？」

「そつだ、ミルクは雪平とは逆側の足を魔法で狙え」

「任せといて！」

「機動力さえ奪ってしまえばドミンも  
マリウスと同じでそう怖い相手ではない……

……では、始めるぞ！散れ！！」

ヴァイスの合図で俺は右に駆け出し、ミルクは左に散る。

「雷刃！」

ヴァイスの魔法が戦闘を開始する狼煙となった。

ヴァイスの剣先から迸る雷撃を受けても大クワガタムシの怪物  
ドミンは僅かに仰け反っただけでそう大したダメージを  
受けているようには見えない。

ヴァイスの魔法はあくまで敵を引きつける為のものだろう。

ミルクが飛翔しながら俺とは逆方向

左右三本、計六本の怪物の足に狙いをつけた。

「速き風よ、我が神の名の下に集いて敵を討つ刃となせ！風刃！！」

ミルクの唱えた風の魔法は狙い違わず怪物の左側の中足に当たる。

だが傷つきはしたが切断するまでには至らない。

「かったいわねー！！」

「俺も負けてられねえな！！」

ヴァイスが正面で敵を引き付けてくれている。

大アギトが物凄い速さで彼を両断しようと閉じられるが……

ヴァイスは引くのも左右に交わすのでも飛ぶのでもなく

姿勢を低くして怪物の口元の直下に滑り込んでいた。

ドミンの大アギトは空しく宙を斬った。

「あそこが死角かよ！！」

体が大きすぎて大アギトの死角が出来る事は

理屈では分かるがあえて前に飛び込むには

とんでもない度胸が居る。

アニキだけに負担を掛けるわけにはいかねえ！！

俺は怪物の右側中足目掛けて走りこみ……

「おおおおおおおっ！！」

全力で大剣を横に振り抜く。

甲高い、金属と金属がぶつかる音が辺りに鳴り響く。

っ！！

手ごたえがおかしい！！

「叩き切れてねえだと!？」

ドミンの中足に剣は三分の一ほど食い込んだではいるものの叩き斬るには至って居ない。

俺の切り込みに不備が有ったとかそういうわけじゃない。単純にこの怪物が硬いのだ。

振りの速度を重視した横切りとはいえこの大剣だぞ!？

なんて硬さの外骨格だよ!!

「なら振り降ろしを……!!」

食い込んだ大剣を乱暴に抜き払い……

大剣を担いで……!!

くそっ、この時間が酷くもどかしい!!

「ぶった斬れるおおおおおお!!」

全力のタメを含んだ唐竹割りを放つ。

狙うのはさつき三分の一斬り込んだ部分に向けて!

バキッ!!と音を立てて奴の中足が押し折れる。

「やったぜ!!」

「雪平　!!踏み込みすぎだ!!」

ヴァイスの大声がこちらにも聞こえた。

「なっ……!!」

怪物の巨大な体躯には似合わぬ棒のような足が横から迫っている。

防御を……剣を構えないと!!

「がっ　!!」

腹部に物凄い衝撃が走る。

俺は、大剣ごと吹っ飛ばされて宙を舞った。

## 第二十四話・小冷孔の戦い・後編

「ぐっ……あああっ……」

痛い、恐ろしく痛い。

吹き飛ばされた反動で

思い切り地面に叩きつけられた。

「ゲホッ……ゴホッ……」

内臓が悲鳴を上げている。

口中に込みあがってきた

血反吐を冷たい地面に吐き捨てるのも辛いくらいだ。

右手の感覚が無い。

何とか動かして見ようとした所激痛が走った。

良く見ると右手は変な方向に曲がっている。

「ゲホッ……ゲホッ……」

嫌な咳が止まらない。

吐く痰にも血が混じっている。

怪物の攻撃で肋骨が肺辺りをやられたか……！？

鎧を着けていたのにも関わらずこれか！

これが怪物と戦うって事なのか……

ヴァイスの言うとおり軽鎧を着込んでいなかったら……

そう思うと心底ぞつとする。

内臓破裂で即死していてもおかしくなかった。

その辺は感謝しねえと……

一撃で重症、酷い痛みだが……

俺はまだ生きている。

……誰かもつと俺のほうが上手くやれるって奴が居たら来いよ。

喜んで替わってやるから。

「ミルク！雪平を回復してくれ！！

ここは俺が引きつける、急げ！！」

遠くでヴァイスの声が聞こえる。

「わ、わかったわー!!」

慌ててミルクがこちらに飛んでくるのが見える。

かつこ悪いよな……俺……

大剣はちゃんと振るえた。

恐怖で足がすくむなんてことも無かった。

そこまではイメージトレーニング通りだった。

ただ深追いしすぎて離脱のタイミングを計り損ねるとか……

その所為で残っていた後足に轢かれたのだ。

「ゲホッ……悪いミルク……」

ちよつと突っ込みすぎた……

これじゃ……また皆に迷惑を……」

「喋らないの！今治して上げるから!!」

ミルクが己の周囲に魔力を集めようとしているのが分かる。

しかし、集まる光はなんだか弱い。

以前見たタジンの町の近くで馬の足を直したときはもっと簡単に……

「La La」

詠うような、いや、実際にこれは歌っているのだ。

美しい響きと旋律……綺麗な唄だ。

子守唄のような不思議な響き。

「癒しの韻律!!優しき風よ!!」

悪しき力によつて負った彼の者の傷を癒したまえ!!風癒!!」

周囲に優しい光が漂い

暖かい何かが俺の中に流れこんでくるのが分かる。

さっきまで酷いダメージを負っていた体が途端に楽になるのがわかる。

「っ、はあっ……はあっ……」

癒しの祈りを唱え終わったミルクが荒い息をついた。

額には汗が浮かび、顔には色濃い疲労の色が見える。

まるで百メートルを全力疾走してきた直後のようだ。

「やっぱり攻撃ならともかく回復は補助なしに使うと消耗が……  
しかも手酷くやられたわね……一回じゃ全快させられないわっ……」  
咳は収まったが腕はまだ動かない。

そういえばこの世界の魔法は……

冷孔の主が居る状態じゃ魔力が集められず

生命力や精神力を思いっきり削ると聞いたが……

ミルクは体力がある方には思えない!!

「おい！ミルク！大丈夫かよ!？」

「私の心配はいいから黙ってなさい!!集中の邪魔よ!!」

ミルクが再び癒しの唄を詠い始めた。

「……おう……」

小さく呟いて戦場を見る。

そういえばヴァイスのアニキが今だ戦っている!!

「魔力よ此処に集いて迅雷となせ 大気を奔れ 光の束」

ミルクの旋律にまぎれて……

ヴァイスの詠唱がかすかに聞こえる。

アニキが詠唱をしている所を初めて聞いた気がする。

「剛雷霆・鳴神」

……雷の雨だ。

大きな音と共に何十本もの光の柱……

雷の嵐が巨大なクワガタムシの怪物・ドミンに叩きつけられる。

「……こいつもおまけだ」

ヴァイスは降り注ぐ雷に向けて核を投げた。

核は今だ鳴り止まぬ雷の柱の一筋に吸い込まれ……

雷が大きく巨大化した。

それはまさしく天から極太の光の矢を打ち込んだようだった。

流石にこれだけやればくたばるだろ……

声には出さなかったがそんな事を思った。

だがそれは大きな間違いだった

あの化け物、体中から黒煙を吹きながら生きてやがる。普通に。

一本、足を切り落とされ、核で強化した巨大な雷の魔法を受けながらまだ……

「アイツまだ動くのかよ!」

思わず声に出てしまった。

なんて馬鹿げた生命力とタフネスだ。

流石に全く影響が出ていないわけでない。

動きはかなり鈍っている。

「癒しの韻律!! 優しき風よ!!」

悪しき力によつて負った彼の者の傷を癒したまえ!! 風癒!!」

ミルクが二度目の回復魔法を唱え終わり……

「おおおおっ!! よっしゃー!! 治ったぜ!!」

俺の腕が再び動くようになった。

「ぜっ……ぜえ……」

ミルクは疲労困憊だ。

地に膝を着いてへたり込んでいる。

冷孔のサポートも無い所で魔法を使えば無理もない事なのだろう……

「ごめんな無茶させて……」

「はあ……けほっ……謝らなくていいから……

早く……ヴァイスさんの加勢に……

さつきから戦いっぱなしだし……さつき上級魔法……使ってるから……

きつと……あたし以上に辛いはず……」

そうだった、ここでもうっとしていいる暇はねえ!!

迷惑かけた分の落とし前はきっちりあの怪物に払わせないと!!

俺の剣!! 俺の剣は何処だ……あつた!!

俺は大剣を拾い上げ駆け出す。

ヴァイスは剣だけでドミンと戦っていた。

顎の一撃を避け、交わし、逸らし……

生じる隙を見計らっては剣戟を入れていくが……

だが巨大すぎる大アギトに阻まれ中々痛烈な一撃は通らない。



「やはり大顎には斬る筋目も突く点もないか……

さて……何時まで持たせられるか……」

「アニキッ！！待たせてすまねえ！！」

「雪平か……！！」

ヴァイスは相変わらず冷静だが

表情には疲労で陰りが落ち

その銀髪は汗でべったりと張り付いている事が見て取れる。

ここまで疲労した彼の姿を見た事が無い。

……今度は同じ失敗はしない。

狙うは、片側、残り二本になった足の後足！

一気に駆け抜けて……

視界の端にドミンを支える後ろ足を捉えた！

俺は両手で大剣を強く握りしめて……

片足を軸に、遠心力を乗せた大剣を薙ぐようにして振り回す！！

ドミンの内側から外側へと、足の屈折部分を薙ぎ払う！！

金属の柱にぶち当たったかのような強い手ごたえを感じる。

痺れを伴う感覚が手から腕、そして全身へと駆け巡る。

「だああああああああああ！！」

だが、そのまま一気に力を乗せて振り切った。

斬れた……今度は斬れた。

丸太のような、しかし体躯の大きさから考えると不自然に細い

ドミンの足がどうつ、と音を立てて地面に転がる。

内側からの方が刃筋が良く通った。

恐らくは外側からの衝撃や斬撃に強いが足の裏側からの斬撃に対し

ては

それほど強い強度を持たない構造になってるんだ……

さつきは逸って態々硬い外側から無理に切り落とそうとしてたんだ

な俺……

「……上出来だ」

ヴァイスが流れるようにドミンの前をすり抜け……

さつきミルクが風刃を打ち込んで切れかけた足を……突いた。怪物が声にならない唸り声のようなものを上げたと思うと……轟音を立てて地面にうつ伏せにダウンした。

「いいぞ……隙だらけだ……こっちは任せろ!!」

雪平! 残りの前足も斬ってしまえ!! それで終わりだ!!」

「おう!!」

後のことは先ほどまでの激闘と比べると呆気ないほどだった。

俺が大剣を振りかぶって

ダウンしているドミンの残った前足を叩き斬り……

ヴァイスは怪物を大顎のある正面から見て左側……

残った左前足と左後足の間接部分を余裕を持って剣で貫通させる。

そして……

「……これで終わりだ」

「くたばれっ!!」

俺達は動きの止まったドミンの背中部分に飛び乗り

ヴァイスと共に頭部と胸部の付け根の中心……

ちょうど装甲の隙間の部分に剣を叩き込む。

巨大な怪物の全体がブルリと震え、何時ものように殻と外骨格、そして蒼く光る大きな核だけを残して体液と組織が赤茶けて湿った砂に変わる。

「まさかこいつの弱点が背中のこととは……」

たしか……背脈管だったっけ? クワガタの心臓部って。

「動いている最中に狙うのは非常に難しいがな」

たしかに……このサイズじゃ飛び乗ってもまず振り落とされるし。上って分かったけどワックス塗りたての床みたいにつるつるしてるんだもの、こいつの装甲。

かといって腹から狙おうとすれば潰されて死ぬだろうし……

「はー、本当に疲れたー」

重たげに翼をためかせながらミルクもやってきた。

「見てたよ二人とも……」

雪平がやられたときはどうなるかと思っただけど……  
何とかなってよかった。

誰一人欠けることなく終わって良かった」

「そうだな……」

「皆ごめんな、心配かけて……」

でも勝ててよかったよ、本当に」

多分誰一人欠けてもこの結果は無かったと思う。

一時はどうなる事かと思っただが……

なにはともあれ、こうやって俺は初めての冷孔の開放というものを  
経験した。

## 第二十五話・その力は誰のものだ？

「……結界を張るぞ、主の核を引つ張り出すから手伝え」

ドミンの青色の核は見えているのだが

甲殻が邪魔して手が届きそうに無い。

「あ、そうだね。このままほっとくと別の怪物が寄って来ちゃうし」

「おっと、そういえばそれが残ってたな……」

そういえば結界を張る作業が残ってたんだった。

「ミルク、辛いだろうが砂をどけるのを頼めるか？」

「ちよつと休憩したし風打一発くらいなら何とか……」

怪物を退けたから周囲に魔力が満ちてきたし……」

「あれ、又シの核が有るのに魔法ぶつ放して大丈夫なのかよ？」

「下位魔法一発程度なら大丈夫だ。核の魔力が開放されるのは

核の持つ魔力以上の攻撃をした場合に限るからな」

ミルクの風打が怪物の組織と体液の残骸の砂を吹き飛ばす。

ようやく青色の核が取り出された。

デカイな……バレーボール位のサイズはある。

蒼い水晶玉みたいだ。

「あーもー疲れたー!!」

ミルクがしゃがみ込んだ。

さつきまで激戦を繰り広げていたのだから無理も無い。

「お疲れ様……二人とも、バスターカードを」

「はい……」

「おう」

俺とミルクは揃ってヴァイスにバスターカードを渡した。

ヴァイスは三枚のカードを重ねると、

又シの核に触れた。

「……結界術式展開」

ヴァイスが平坦な声でそう呟くとカードと又シの核が光り輝き……

辺りの空気が変わった気がする。

気温自体は寒いままだが気配が違う。

人の立ち入りを拒むような気配から少し安心できる気配になった。

「これで、もう怪物は入ってこれない。」

人数制限の結界から怪物避けの結界に切り替わったわけだ」

「なるほどな……」

「そういえばさー、この冷孔どうするの？」

ミルクがそう尋ねてきた。

「俺は領地など持つ気は無い。」

売って金銭に換えて三等分する。

新しい装備を整えるなり旅の資金にするなり金は何かと入用だ。

二人ともそれでいいな？」

「俺も土地なんか持つてもしょうがねーよ」

そういえば怪物から開放した土地はバスターのものになるんだっけ。

「……ふうん、そっかそっか……」

あたしもそれでいいよ」

ミルクは何か少し思う所があるようだった。

「躊躇い無く三人分でアカウントをとるなんて

やっぱり普通のバスターと違うかも」

「三人で協力して開放したんだからそれが普通なんじゃないか？」

「実際はもつと揉めるのよ」

ミルクはため息を付いた。

「大抵は大人数で冷孔を開放した場合

誰が怪物の討伐で一番活躍したかですっごいもめるの。」

その人がアカウントを手に出来るから」

MVP……って訳か。

「皆が平等に開放した、って形の協力開放もあるんだけど

協力開放って事と単独開放ってことは大分旨みが違うから……」

お金に変えるにしたって人数が多ければ多いほど一人の取り分は減るの。

アカウントは一人で持つてれば地主だし

お金に変えられるからねえ……色々トラブルが付き纏うのよ。

私だってシルバーカード手に入れる為にすごい苦労したのよ？

態々お金に変えること前提のバスターチーム探して、

報酬の殆どを放棄することを約束してようやくランク上げられたんだから……！」

ミルクはプリプリと思い出し怒りをしている。

「ヒーラーは直接怪物に手傷を負わせにくいから……」

大人数で冷孔を開放した場合

アカウント

最悪冷孔開放権を巡って殺し合いにすら発展する。

冷孔の戦いは基本的に誰も見ていない……

仲間を怪物との交戦で死亡したことにしてな」

ヴァイスは苦味を僅かに口元に湛えて言った。

「なんだよそれ……馬鹿げてるぜ」

一緒に戦った仲間を殺してでも金が欲しいのか？

だが中にはそういう奴らも居るんだろな……

「ああ、馬鹿げていると俺も思う」

「全くね、敵は怪物なのに人間が私利私欲でお互い争って……」

協力し合わないと冷孔の開放は中々出来ないのに……

その辺りが冷孔の開放が遅々として進まない理由でも有るとあたし

思うのよ。

神様もお怒りだと思うわ。

教義で一番やってはいけないこと、禁じられた事が

種族は違えど同じ人間同士が私利私欲でいがみ合い殺しあうことな

のに……

そんなことしてたら何れ人間は怪物に滅ぼされてしまうと云われて

いるわ」

「……俺もそう思うよ」

心の底から俺はミルクに同意した。

この世界の神様割と良いこといつてるじゃねえか。

この戦い、ヴァイスが引きつけ、俺が怪物を攻撃し、ミルクが傷を癒す。

誰が欠けてもなし得なかっただろう。

それくらい怪物は強いのだ。

「このパーティーの雰囲気はいいわ。」

ヴァイスさんは無愛想だし雪平は突撃馬鹿だけど……

背後にまで気をつけなくていいもの」

ミルクはしみじみとそう言った。

「倒すべきは怪物だろ？何で味方同士殺しあわなきゃなんねーんだよ」

「報酬でもめるなど時間の無駄でしかない」

「あんたらはそういう奴らよね……うん……」

あ！そうだ雪平！さっきみたいな無茶はしないでよね！！

軽い怪我ならまだしも重傷を負うとヒーラーにすっごい負担が掛かるんだから！！

怪物を怖がらないのは認めてあげるわ！！

でも死んじやったら元も子もないじゃない！」

さっきのしおらしい態度とは打って変わって凄い剣幕で怒鳴られた。

「わ、悪かったよ……ほんとごめん……」

俺ももつと冷静にまわり見て戦わないとダメだな……」

「……一度手痛い目にあってそれに気づけたようなら俺からは何も言わん」

ヴァイスはそれ以上はこのことについて何も言わなかった。

それから黙って荷物を紐解いて火を熾す準備を始めた。

「あれ、すぐ帰るんじゃないの？」

「雪平に魔力になれてもらわねばならないからな。」

疲れているようならミルクは先に帰っても構わないんだが」

「こうなったら最後まで付き合うわよ」

そういえばすっかり忘れていたが……

此処の冷孔を開けたら

魔法の使えない俺の為に冷孔から出る魔力を浴びて  
最大容量を上げるって目的も有ったな……

俺たち三人は火を囲んでそのまま暫くそこに居ることになった。  
今、この小冷孔に有るものといえば怪物の死骸と蒼い光を放つ核  
そして火を囲む俺たち三人……

戦い終わって汗が冷えてきたら冷孔の寒気が余計に寒く感じる。  
戦闘直後は涼しくてありがたい位だったが……

じっとしていると火に当たらずには居られないくらいに寒い。  
まるで空間全体から寒気が染み出しているようだ。

「どう？何か変化はあった？」

「んー……寒さ以外でなんか……」

手足の先がピリピリする以外には別に……」

「魔力が浸透しつつあるのかもしれない。」

区別のためにもちゃんと手足は暖めておけよ」

「へーい」

凍えて震えたりするのはまた別種の感じた。

微弱な電流と一緒に流しながら細かい針でつつき回されているよう  
な……

しかし俺にとってはこの魔力というのがどうにも肌に合わない。

魔法が凄いつて言うのは分かる。

ヴァイスのアニキが使う雷もすげえし

ミルクが使う回復魔法や風の魔法も凄いとおもう。

ミルクに直して貰わなければ俺は今も重症で生死の境を彷徨ってい  
ただろう。

下手をすると死んでいたかもしれない。

だけど……俺は何か、怖いのだ。

この凄まじい魔法と魔力という力が。

魔力が無い所ではミルクはあんなにやつれながら魔法を唱えなけれ  
ばならなかった。

本来の魔法というものはああいうものなのではないだろうか？



冷孔からは相変わらず魔力と冷気が噴出し続けている。

その力は誰のものだ？

本当に俺達のものにしている物なのか？

本来は怪物の動力源……その源となっているのは封印された邪神……

魔力って一体なんだ？

「なあヴァイスのアニキ……核つてのが怪物の魔力の源だよな？」  
「そうだ」

「怪物は魔力さえあれば生きていけるのか？」

冷孔に集まる性質もそうだし……」

「生きている、というのは正しくないが……魔力ある限り動き続けるだろうな」

「生き物としておかしいな……」

魔力さえあれば生きていけるのに何で人間を食い殺すんだよ？」

人間以外の生物は生きていければ無駄な争いなんて基本的にしないはず……

いや、縄張り意識でもあるのか？

「一つ、怪物は人間と神々と戦うために創られた。

二つ、怪物が人間を食い殺すのは人間の体内にある魔力を求めてのことだ」

ヴァイスは相変わらず端的にそういった。

「ううん……」

やっぱり魔力が鍵なのか……？

「まあ、神と人間の敵の事について倒し方以外に考えても無駄じゃない？

そんなこと本当のところ魔人と邪神しか知らないんじゃないかな」  
ミルクはそう言った。

まあ確かに倒し方以外についての考えはそれ以上どうなるものでも

ないけど……

「魔人ってなんだ？」

また新しい単語が出てきた。

「魔人ってのは七種族に数えられない

邪神を信仰し怪物に命令を下すヒト種の裏切り者よ。

邪神の持つ強大な力に魅入られた愚か者……

呪われた暗黒魔法を使い災厄を齎す存在……とされてるわね。

まあ、教会や国家の尽力もあって……

パラダイムでは全滅したって話が出てるし気にすることは無いわよ」  
全滅した……か……

彼らは何を思っただ邪神に組したのだろうか？

ひょっとして冷孔の向こう側の世界ではまだ彼らが生きているのではないのだろうか？

俺はふと、小冷穴の中心に目を向けた。

まただ 誰かが、俺を見ている気がした。

「う……またこの感覚かよ……気持ち悪……」

「雪平？」

火に当たりながら、俺の意識はゆっくりと闇に落ちていった。

## 第二十六話・自己の輪郭

……またこの闇だ。

世界は黒一色。

以前もこの暗黒を見た気がする。

たしかタジンの冷孔の前で倒れたときだったか。

これもまた夢なのか？

前は何かも曖昧模糊としていたが……

今回は少し様相が違う。

黒一色の世界で自分の輪郭だけがはっきりと見える。

普通、真の闇の中では自分の手足さえ良く見えないのに。

此処にあるのは闇に近いけど全く違う何かなのだろうか？

……足元が水中に居るように頼りない。

地面が無いのだ。

粘性の高い液体を蹴って浮いているような感覚を覚える。

手にも何か纏わり付くようだ……

粘り気の高いべた付いた糊のようなものが……

酷く肌を刺す。

息が出来ないわけではないが……

凍えるように冷たいのに

焼けるように熱い。

電気を流されたように

肺も喉も痺れる。

得体の知れない真つ黒な何かがこの空間に静かに、

しかしみつしりと密集してわだかまっている。

長い間此処に居てはいけない気がする。

まるで自分の輪郭が溶けていきそうだ……

「うわ、わっ！！」

溶けていきそうだでは無い！

実際に溶けて行っている！！

ちょこつと爪の先とか身に付けてる鎧の一部とか……

この黒い霧か液体かに吞まれて溶けている！！

「俺に触るなどけて！！」

纏わり付く何かを必死に振り払おうと俺はもがいた。

このまま抗わずじっとしていたら

きつとこの黒に吞まれて消えてしまう。

俺は自己の、自分の輪郭を保とうと必死だった。

「何だよこの黒い霧は！！」

《かつて……我………力》

まただ。

以前タジン冷孔で聞いた覚えがある声だ。

《扉 けよ》

今回もまた掠れており、ノイズがあつて良く聞こえない。

「誰か居るのかよ！！居るなら姿を見せてくれ！！」

《……開けよ》

「だーかーらー、俺の質問に答えろって！！」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

「はっ！！」

いつの間にかまた俺は気絶してしまっていたらしい。

自己の輪郭がなくなるってのは

あんまり気分の良い夢じゃないな……

「あ、起きた！！ねえ大丈夫！？」

ミルクが心配そうにこちらをゆすっていた。

「……体に異常は無いか？」

ヴァイスもそう尋ねてくる。

「何でもねえ……冷孔の又シのドミンに

大怪我を負わされたせいかな……

その所為でちよつと悪い夢を見ただけだよ」

「魔法で傷はふさいだとはいえ

……体力をかなり消耗しているのかもしれない」

「そうね、一旦切り上げて町でしっかり休んだほうがよさそうね…

…」

その時、ヴァイスが何かに気が付いたように俺を見た。

「む……雪平の最大魔力が上がっている」

「あ、本当だ、雪平の魔力が上がってる……」

ヴァイスとミルクがそう言った。

「マジか！？どのくらい上がった！？」

「……ようやく一般人レベルといった所だ」

「前見たときは不自然に少なかったもんね！。

今は普通の人と同じくらいあるわね」

「……………」

なんだかちよつと泣きたくなった。

俺の魔力、一般人より少なかったんだ……

多分訳の分からん魔法に取られてる所為だろうけど……

剣を振るのに支障が無いから別にいいんだけどよ……

なんだろうこの切なさ。

才能ないって言われたときのあれは……

これはミルクに脳筋扱いされても仕方ないと思う……

「まあいいや……上がっただけでも御の字という事にしよう……」

「そう落ち込むな……」

「と、とりあえず雪平の魔力も上がった事だし帰りましょう」

「そうだな……ゆっくり休む事にするか」

「おう……」

心折れないように頑張ろう……

魔法のほうは才能無いかもしれないけど……

## 第二十七話・冷孔転移

「む……これは……」

転移をしようとドミンの蒼い核にバスターカードを当てていたヴァイスが顔を顰めた。

バスターカードから赤い光で出来た文字列が浮かび上がっている。

「なぜか地脈が乱れている……」

落ち着くまで暫くは転移が出来そうに無いぞ」

「どうしたのかしら？こんな事滅多に無いのに……」

ミルクとヴァイスはいぶかしげだ。

「うつむ……術式が示す地脈の状態を見ると……」

流れが落ち着くまで一時間くらいは待つ必要があるそうだな」

「仕方ないわ。もう暫く焚き火に当たって待つとしましょう」

俺たち三人は、再び焚き火に当たって待つ事になった。

「なあ……」

「どうかしたの？」

さっきの夢が気になった俺は、二人に尋ねてみることにした。

「強すぎる冷孔の魔力を浴びると体が崩れるとかつてあるの？」

「ないない、そんな事あるわけ無いでしょ」

呆れたようにミルクは手をひらひらさせた。

「どうしてそんな馬鹿な事を思いついたか知らないけど……」

そうねえ……例えば最大魔力を入れ物、魔力を液体に例えると……

普通に水をコップや桶で汲んでみてコップが桶や壊れる？

ただ限界以上は入らないだけよ」

ミルクは何アホなこと聞いているのといった風情だった。

「……その場合はまずありえないな

冷孔から湧き出す魔力は穏やかに湧き出る泉みたいな物だからな……

攻撃魔法のような指向性を与えられたものは別だが」

ヴァイスは少し考えるような素振りをした後、冷静に否定した。

「いくなれば攻撃魔法は激流だからね」。

その場合肉体ごと最大魔力の器もぶっ壊れるわね。

あとはそうね……暗黒魔法の呪いみたいに

魔力自体に肉体や精神を蝕む性質が付加されてるなら  
そういうことも起こりうるでしょうけど」

「ただ冷孔の魔力を受けても魔力上限以上は入らない。  
穏やかな流れに桶を入れたみたいに自然と満ちるだけ。

攻撃魔法の魔力は激流だから肉体ごと壊れる。

呪いを受けると魔力の性質は無害な水じゃなくて酸に変わるってわけか」

ミルクが満足げに頷いた。

「まあ、そんなところね。

宙空を漂う魔力が幾ら多くて強くて濃くても私達の器が汲みきれないだけね。

なんか変な術式が付加されない限り無害と考えていいわ」

「雪平の言った事が実際に起こりうると思えば……」

王都の魔法学院の論文にあった仮説の事態が起こった時くらいだろう」

「ん？それってどんな？」

「転移の失敗でパラダイムではなくヴォイドに落ちてしまった場合だ。

その場合、邪神の強すぎる魔力、或いは瘴気や邪気に肉体が浸食され自己の輪郭が崩壊する可能性について示唆されていた」

「……眉唾ねえ……それってあくまで妄想の域を出ないでしょ。

頭でっかちな学者やソーサラーが

机の上で考えた事が何処まで正しいんだか……」

そりゃまあ、邪神の所に普通の人間が行けばそうなるかもしれないけど……」

でもパラダイムの大地の上に居る限りそれはありえないわ。

神々が創った結界が邪神の邪気も瘴気も遮断して

冷孔から純粹な魔力を取り出してるはずなんだから。

冷孔転移の失敗なら冬枯れの村に繋がるってほうがまだ信憑性があるわ」

うーん……

俺は本来異世界、日本の人間だから二人が会話しだすと置いてきぼりにされてしまうのが切ない……

「なあなあ、ヴォイドと冬枯れの村ってなんだ？」

「ヴォイドは沢山の魔人や怪物、邪神が封印されている地獄のことよ。」

あんまり良い言葉じゃないから私は使いたくないけど……

冷孔の下にあるとされ、魔界とも呼ばれるわね。

教義では悪人の魂も死後ここに落ちて

未来永劫邪神に責め苛まれると言われているわ」

ミルクがそう説明してくれた事で納得が言った。

ああ、なるほど……邪神の封じられた世界の名前がヴォイドか。

ヴァイスが読んだ論文の仮説をミルクが眉唾っていたのはそういうことか。

パラダイムの宗教観で生きたまま地獄にいくとか言われてもピンとこないだろう。

「じゃあガイアってどんな感じなんだろうな？」

途端にミルクが目をきらきらさせた。

「ガイア……至高天ね！」

神々の住まう地ルクス・エテルナに最も近い

雲の遙か彼方に座するという

鳥人族の翼でさえも辿り着けない天上の聖なる世界！

一説には一切の怪物が存在しない、怪物に脅かされない場所とされているわ！！

清らかな魂だけが死後此处に登っていく天国、楽園とされているわ！！」

一切の怪物が存在しない……



確かに、地球には一切の怪物なんかいないさ。

日本は世界と比べれば確かにマシな生活を送れているけど……

だけど、地球は決して楽園なんかじゃない。

人々が優劣を競いどうしようもない世の理不尽渦巻く

人が合い争う世界……

「もし、パラダイムから怪物が一掃出来たらどんなに素敵でしょうね……」

もう人が怪物に襲われる事なんて無いのよ？

そのときこそ福音の時、ガイアが地上に降りてくるそうよ」「

ミルクの純真さが胸に痛い。

ガイアが地上に降りてくる……か。

科学を使って人同士が戦いあうのがガイア（地球）なら……

魔法を使って人同士が争うのがパラダイムに変わるだけかもしれない……

彼女は胸を張って希望を信じている……

……ミルクの夢を壊すのも可哀想だ。

俺はサンタクロースを信じる子供に真実を告げることが出来ないタイプだ。

だから……

「……きつと良い所さ……自然豊かで……」

平和で自由に想像も出来ないくらい便利で……

全部終わったら俺も行つて見たいよ。

俺は是非ともガイアに行きたいんだ」

……俺は嘘をついた。

いや、半分しか本当の事を言っていない。

自然豊かなのも便利なのも自由で平和なのも行きたいと言うのも全て本当だ。

ただどす黒い現実を口に出さなかったただけで。

「行けるわよ、きつと、いつかは」

多分ミルクは違う意味で受け取ったのだろう。

だけど訂正する必要は感じなかった。

「……………ありがとう。」

所でさ、ヴォイドの話は聞いて分かったけど冬枯れの村って何なんだ？

冷孔転移に失敗すると行くらしい事は分かったけど…………

転移に失敗すると石とか土の中にめり込んだりしないのか？」

なんだかゲームでレポートの座標設定に失敗して

そんなとんでもない事になったりすることが合ったはず。

「ほんとに雪平は術や魔法の知識は完璧に忘れ去っちゃってるみたいねえ…………

うーんとね……………例えば地下の洞窟やトンネルを通るとするじゃない？」

「おう」

「普通に通って石の中や土の中にめり込んだりする？」

「……………しねえな。トンネルが崩れない限りありえない」

「冷孔転移は決められた地脈の中を通る

眼に見えない術で創られた概念のトンネルなのよ。

ただし普通の道よりも思いつきり時間を短縮できるやつで」

「ふむふむ……………それが冬枯れの村ってのにどう繋がるんだ？」

「冬枯れの村は御伽噺や英雄譚に出てくる村ね。

転移の失敗でしか行くことの出来ない村。

この世の何処かに存在するとされてる

普段は何処とも地脈が繋がっていない孤立した冷孔の村の事よ」

「……………行ける物なら行って見たいものだな……………」

これまで黙っていたヴァイスが口を開いた。

「あら、ヴァイスがそんな事を言うなんて意外ねー。

バスター関連の事にしか興味ないかと思ってた」

「……………俺にも興味のあることくらいある」

確かにアニキがこういうのは珍しい。

「そういえばさー」

ミルクが質問した。

「ヴァイスと雪平って素材回収しないの？」

「素材回収……？」

ああ、そういえば武器屋や防具屋に怪物由来の武器防具があったなあ。

スラの甲殻で出来てる鎧とか……

「怪物の甲殻を回収することか？」

「そうそう、武器屋や防具屋に持ってけば引き取って換金してくれるし……」

材料持込でバスターカード提出すれば割安で武器防具を作ってくれるし

私はヒーラーだし飛ばなきゃなんないしで

あんまり重い武器や防具装備できないけど……

あんた達には有効そうじゃない？」

「移動の邪魔になるから核以外は拾わない主義だ。

それに今使っている武具防具となると中冷孔かそれ以上の

武器防具でないと回収する意味が無い。

そういえばミルクはいいのか？」

怪物の殻で武具を作る事は不浄だとする信徒も居ると小耳に挟んだんだが……」

「あー、でもそれ教義的には全然問題ないわよ、浄化済みの範疇に入るから。」

ほんとに潔癖な教会の信者の人だと嫌がる人も居るけど少数派ね。

それにねー、初代教皇のコードロン様が打ち倒した

大冷孔の魔鳥の残骸で聖杖を作ってるし……

基本的に邪神の眷属への勝利の証みたいな感じだから大丈夫よ。

教義で真に不浄とされてる怪物の砂より全然マシ」

「実際邪神の封印の戦利品である魔力は日常的に使われてるしな……核は魔道具や魔力制御に利用されている……」

それに怪物の甲殻は強度が高く武具防具として非常に実用的だしな

……  
実際に善き神は勝利の証として魔力を邪神から奪い取っている……  
打ち倒した勝利の証である甲殻や核まで不浄とするのは無理がある  
だろう」

「じゃあ何で怪物の砂は教義では不浄とされているんだ？」

「……ごめん、ちょっと私の口からは言えない。  
語るもおどましい事だから」

「……怪物の砂に人間の血肉を捧げると怪物は賦活するからだ」  
ヴァイスは何時もの口調で冷静に言い放った。

賦活？復活や再生じゃなくて？

「ちょ！ヴァイスさんあんた何で知ってるの！？」

この事は邪教徒に漏れると不味いし……

善良な人間もバスターも知る必要は無い知識だから  
神官以外には秘されている筈なのに……」

「実例を見たからだ。偶々バスターパーティを組んでいるときに  
倒した怪物の残骸に……その……

別の怪物の攻撃で亡くなった人が丁度……な。

……倒したはずの怪物が見る間に賦活して襲い掛かってきたよ」  
「うわぁ……」

思わずうめき声が漏れた。

ヴァイスのセリフは大分オブラートに包んでいる事が分かった。  
言葉を濁すのも無理は無い。

怪物の攻撃を受けたら……

「ああそういうことね……」

怪物が他の怪物の為に人間を捧げる所見ちゃったわけか……  
それはキツイわね……」

ミルクは容易に想像出来たらしく顔を青ざめさせた。

「長くバスターをやっているとこういうことも起こる……  
決して何度も見たい光景ではないがな……」

「怪物の不浄の砂は即座に七大神の司る属性に晒せ。

教義にもそうあるわ。

話を戻しましょうか……ドミンの甲殻どうするの？」

「うっむ……運ぶにしても解体するにしても人足が居るな……」

「雪平の大剣の材料辺りにはびったりなんだけどね」

確かにあの頑丈そうな角はそのまま大剣に転用できそうだ。

そんな事を話しているうちに……

又シの核の上に浮かんでいた赤い文字列の色が白に変わった。

「あ、地脈が正常に戻ったみたいね」

「すぐ帰るつもりだったのになんだか話しこんじゃったな」

「そうだな……あの甲殻については帰ってから考える事にしよう」

俺達は又シの核の周りに集まった。

ミルクは物入れから何か細い布を取り出した。

形状から察するに目隠しのようだ。

「あ、忘れてたけど雪平、冷孔転移するときは目を瞑ってなさい。

大丈夫、目を瞑っていても術式が発動すればちゃんと着くから」

「どうしてだ？」

「初代教皇コールドロン様のお言葉だけど……」

冷孔の転移時には目を瞑るべし。

善良なるか弱き人々が見るべきでない者が

映り込む事が有るが故に、だってさ

教会では専用に目隠しを売ってるくらい」

ふむう……さっきまでの説明はなんとなく実用的な理由があったけど……

やっぱりこつちの世界には色々とルールがあるみたいだなあ。

「転移術式を起動させるぞ」

「はい、ちよつとまってね……これでよし、と」

ヴァイスのそのセリフと共にミルクは目を目隠しで覆った。

「冷孔転移術式、起動」

ヴァイスのそのセリフと共に

足元に魔法陣のような物が展開され……

俺達は眩しい光に包まれた。

## 第二十七話・冷孔転移（後書き）

ふかつ（賦活）

活力を与えること。物質の機能・作用を活発化すること

## 第二十八話・打ち上げ

景色が歪む。

周囲の風景が特殊効果を掛けた様に細長く引き伸ばされ  
コンピューターグラフィックスのように擦れていく。

そして物凄い速度で自分の後方に流れていく。

これが冷孔転移か……

……長く見つめっていると酔いそうだ。

冷孔の転移時には目を瞑るべし……ねえ……

これがその理由かな？

俺は慌てて目を閉じた。

「……到着したぞ」

ヴァイスの静かな声で目的地に転移したことを知る。

俺が目を開いて良く周囲を見渡すと

四本の石の柱が立ち並びその間に鎖が張り巡らされた場所だ。

出入り口と思しき場所には一人の衛兵がこちらに背を向けて立っ

ている。

その隙間から見える景色は見慣れたタジンの町だった。

そろそろ日が沈みかけているので行きかう人は疎らだが……

「え、本当？」

ミルクが目隠しをとった。

「あ、バスターの方ですね、お疲れ様です」

こちらに気が付いた衛兵が出入り口の前から退いた。

「早く移動するぞ……何時までも転移指定地点に立っていると邪魔になる」

ヴァイスにそう言われて、慌てて着いて行く。

衛兵は一礼したまま俺達を素通ししてくれた。

「あれ？冷孔転移とかってお金が掛かるんじゃないの？」

俺は素朴な疑問を口にした。



「それは他の町に行く為の行き道の時だけよ。

私達がいま出てきた所は、新しく開かれた冷孔から来るバスター専用の出口なの」

その疑問にはミルクが答えてくれた。

「あっちが他の町に行くときの出入り口」

そしてそのまま周囲にあった大きな建物を指差す。

巨大な石柱が立ち並ぶ屋根つきの建物だ。

まるでギリシャのパルテノン神殿をシンプルにしたような立派な石造りのデザイン。

その周りではこちらよりも多くの衛兵が巡回し

馬車がそのまま通れそうな検問と

料金を払う関所のような場所がある。

その周りには露天が立ち並び、建物や町の雰囲気は違えど

駅前の駅舎のような風情だ。

「ふーん、そうなのか……」

「それにね……今私達が開いてきた小冷孔のアカウントは私達が持つてるのよ。」

開きたての冷孔は皆そうだけど……

あの空き地には建物なんか何にもないから

実質魔物避けの境界分しか魔力は使われてない……

転移に使う魔力は全然余ってるわ」

「だからお金を払う必要は全く無いわけか」

「ん、そういうことね」

今しがた開いてきた小冷孔は今のところ俺達のものか……

まだ村や町は出来てないから転移の分の魔力は有り余っている。

転移に必要な魔力が向こうの小冷孔持ち、と。

権利と魔力の問題を解決できれば金は払わなくていい、と。

「今日くらいはタジンで一番良い宿に泊まるうぜ」

「賛成！私ももうくたきたよ……」

「……まあ、今日くらいはいいだろう」

それから俺達は鉛のように重い足を引きずって  
タジンの町一番の宿に移動した。

獅子王亭と名の付いた三階建ての大きな宿屋だ。  
確かに町一番の宿だけ有ってロビーから違う。

今まで泊まっていた宿屋は

一階が酒場で荒くれのバスターや傭兵たちによって常に騒がしく  
足元は飲み物や食べ物がおぼれて薄汚れたぎしぎし軋む木の床だっ  
たのに。

だがこの宿の足が沈みそうなふかふかの真つ赤な絨毯は  
これだけ疲れている状態だと下手すると足を取られそうだ。  
宿につくとヴァイスは躊躇い無く二階丸ごとを所望した。

これには俺もミルクもびっくりした。

「まるでお大尽か貴族さまね……」

「時々アニキは金の使い方の箍が外れるからなあ……」

普段はつましやかなのに……

最初宿の主人は訝しげだったが

堂々とヴァイスが金貨の入った皮袋を渡すと目の色が変わったのが  
伺える。

急激に態度が礼儀正しくなった。

「お腰の物を預からせていただきます」

俺達はフロントに武器を預けると階段を上った。

控えの間か食堂と思しきそこもまた

これまでの宿と比べると贅沢な部屋だった。

壁にはちゃんとした壁紙が張られ額縁に絵が飾られている。

壁の照明は魔力で灯るタイプの奴らしい。

磨かれたテーブルの上にある燭台の蝋燭も白い普通の蜜蝋だ。

蝋燭に違いが有るのかって？

俺も初めて知ったが……獣脂蝋燭と蜜蝋は全く違う。

安っぽい酒場やこっちの一般家庭で使う蝋燭は

蜜蝋じゃなくて獣の脂の蝋燭で燃やすと嫌な臭いがするんだよ。

「すごい！ねえねえ各部屋にお風呂付いてるよ！！」

日本の旅館やホテルとかだとそう珍しくは無いのだが  
こちらの世界ではそうではない。

ミルクがはしゃいでいる。

やっぱり女の子だもんなー。

「そりゃ有り難いな……飯の前に汚れを落としておくか」

正直に俺はそう答えた。

個室の風呂に入るのは久しぶりだ。

それぞれ自分の部屋に入って軽鎧を脱ぎ捨て

……ユニットバスに似た風呂に浸かったら危うく溺れそうになった。

汚れを落として温かい湯に浸かった瞬間

戦闘の疲れの所為で全身の筋肉が溶けて流れ出そうな錯覚を覚え  
そのまま眠りこけてしまう所だった。

風呂から這い出すのに多大な気力を振り絞る必要があった。

備え付けのローブに着替えて何とか食堂のイスに座った時には突っ  
伏していた。

「あゝ……死ぬほどだりい……」

「……中冷孔大冷孔ともなるともつと辛いぞ」

同じく食堂のテーブルに座るヴァイスは何時もの通り鉄面皮だ。

彼も鎧を脱ぎ捨て普段着に着替えている。

本当に冷静沈着が皮被って歩いてるような人だ。

「おそらくそうだろうけどよ……どういう感じなんだ？」

「中冷孔以上ともなると戦闘後は鎧を脱ぐのさえ億劫だ

指一本動かしたく無くなって眠りたいとしか考えられなくなるな」

「うへー……」

アニキでさえそう思うのかよ……

というか、今の俺がまさにその状態なんだけど……

「あー……翼がおもたーい……」

お風呂は好きだけどこればかりはどうにかならないものかしら……

……」

ミルクが部屋の扉を開けて出てきた。  
濡れた翼が非常に重そうだ。

戦闘で飛べるのは滅茶苦茶便利だけどこういう時は大変そうだな……  
ミルクが来て程なくして

宿の小間使いの人達によって料理が運ばれてきた。

すきっ腹にこれは非常にありがたい。

「よっしゃー！！飯だ飯ー！！こういうときは打ち上げだぜー！！」

「うんうん、勝利を祝うのは悪くないわね」

「……そうだな」

「それじゃ……私達の小冷孔開放を祝して……」

ミルクが飲み物を入ったグラスを持ち上げるのに俺達も習う。

どうやら中身は葡萄酒のようだが……

ここは日本じゃなくてパラダイムだ。

ドイツでは16、オーストリアでは15から飲酒可能なんだし。

国が違えば飲酒のルールも違う。

こまけえことはいいんだよ。

「かんぱーい！」

「乾杯！！」

「……乾杯」

三者三様の声上がる。

派手に盛り上がる事こそ無かったが

俺達は大いに飲んで食べた。

そうして、静かに勝利の余韻を噛み締めていた。

中冷孔、大冷孔を明ける頃には

もっと仲間も増えて大いに騒げるといいな……

## 第二十九話・パーティ命名の儀

打ち上げの翌日……

俺はベッドの上で目を覚ました。

窓から差し込む太陽から察するに随分と日が高くなっている……

「うーん……もうこんな時間か……」

随分と疲れていたらしい。

大分寝過ごしてしまったようだ。

「まあしかたねえか……」

昨日の小冷孔の戦いは随分と長く感じられた。

色々な事がありすぎて恐ろしく密度の濃い一日だった。

宿の部屋から出ると、控えの間兼食堂にはミルクが居た。

半分眠ったような目でモグモグとパンをかじっている。

「あ、おはようゆきひら……」

「おはよう！」

俺もイスを引いて席に座る。

「いただきます」

今日の朝食はパンとスープか……

コーンスープの方は俺が寝過ごした所為が大分冷めてしまっているが

それでも十分美味い。

パンの方も固くて黒ずんだものではなく

白くて柔らかい普通のパンだ。

この世界の食事はほんつとくにランクに寄ってバラつきが有るなあ

……

日本の食事のクオリティって実は結構凄かったんだなあ……

「うん、うめえうめえ……そういえばヴァイスのアニキは？」

「部屋には居ないみたいだけど……」

ふとテーブルを見ると彼の分の

食べ終わった皿がカートに片付けられている。

「あれ、何処かに出かけたのか？」

そんな事を話していると

こつ、こつ、と静かに階段を上ってくる音が聞こえた。

「……今、起きたのか」

どうやらヴァイスが出かけた先から帰ってきたらしい。

だけど今日は背中に白い布に包まれた長い荷物を担いでいる。

「おかえりアニキ」

「あれ、どこに行ってたの？」

「……お前達が中々起きないから色々とな」

白い布に包まれた長い荷物を降ろしながらヴァイスは説明し始めた。

「ドミンの素材の回収に行ってきたんだ」

どうやらあの白い布の中身は昨日倒したドミンの素材らしい。

「俺一人で旅してるなら素材は拾わない主義だが……」

今はパーティを組んでるからな……

雪平の装備も、力量に合わせて新調していった方が良いと思ってな」

ヴァイスのアニキは本当に気が利く……

うつうつ……本当に仲間の有り難さが身に染みるなあ……

俺はまだまだ弱いからいろんな人のお世話になりっぱなしだ。

早く実力をつけて皆の役に立てるようになりたい。

「俺の為に何から何まで……」

ありがとうございます、アニキ」

「なに、気にするな……」

お前が強くなれば俺もそれだけ楽になる」

「へえ……前から思ってたんだけどヴァイスさんって

意外と面倒見が良いのよねー」。

うんうん……実は結構優しい人？」

ミルクがちよつとニヤニヤしながら茶化した。

「何言ってるんだミルク。」

アニキは不器用だけど良い人だぜ」

俺もそれには同意する。

「む……そんな勘違いをされては困る。

俺はただ純粹にパーティの戦力を考えてだな……」

「はいはい、そういうことにしときましようか」

ヴァイスは少し大げさに咳払いをする。

「……バスターズギルドに行つてアカウントの売却手続きをするぞ。二人とももたもたするな」

「はい」

「ういーす」

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋

それから暫く後……

俺達は再びバスターズギルドに顔を出していた。

何時もの片眼鏡をつけた老紳士が出迎えてくれる。

「おや、これは久しぶりですな。

本日はどのようなご用件で？」

「おう！今日は三人で冷孔<sup>アカウント</sup>開放権の売却に来たぜ！！」

ヴァイスに促されて背負い袋からドミンの核を取り出した。

青く光るバレーボールくらいの大きさの核だ。

大きさの割には軽いとはいえ……

ここまで持つてくるのは結構大変だった。

「おお……これは小冷孔の核ですな……」

少々お待ちくださいなれ」

そういつて老紳士はカウンターの奥から何かを取り出そうと

ごそごそと探している。

どうやら目当ての物が見つかったらしい。

老人が手にしているのは小さな怪物の核の付いたルーパーのような魔道具だ。

それをドミンの核に当てると

にわかにドミンの核が青白い光を放ち

数行の謎の文字列が空中に浮かび上がる。

「新規開拓の地脈と冷孔からの転移記録……

遠隔起動中の術式は結界展開術式……

アカウント登録者はヴァイス……ミルク……ユキヒラ……間違いありませぬな」

「なあなあ、あれは何を調べてるんだ？」

気になったので二人に聞いてみる。

「あれはあの核が確かに新規の核かどうか調べてるのよ。

目には見えないけれど、専用の魔道具を当てれば

バスターカードから冷孔の又シの核に焼き付けられた術式が見える仕組みになってるの」

「同時に解放者の名前も又シの核に刻印されるからな。

解放者以外がその冷孔に新しく術式を登録したり

魔力の配分や流れを決める事は基本的に出来ない」

不正を防ぐための処置か……

「お待たせしましたな。

それでは売却の手続きに入らせていただきますとして……

協力開放ということですのでお三方のバスターカードをお貸しくだされ」

俺達はバスターカードをギルド受付の老人に手渡す。

俺のカードを見て老人が何か気が付いたようだ。

「おや……こちらの方のカードはブロンズカードですので

昇格の手続きも同時に行わせていただきます。

カードを作り直しますのではしお待ちくだされ」

「よろしく願いますぜ」

「すっかり早いわよねー。バスターになってから一週間強でブロンズバスターからシルバーバスターになるなんて」

ミルクが殆ど感心したように、そしてちょっと不満げにそう言った。

ミルクはヒーラーでその職業特性上昇格するのに

色々苦労した経験があるからなあ……



「確かに異例の速さかもしれませぬな」

ギルドの受付のおじいさんもそう呟いた。

「あ、はは……皆がいてくれたお陰さ。」

俺一人じゃ絶対無理だったし」

間違いなくそう断言できる。

俺一人ではまだ小冷孔の又シを一人で倒せる力など無い。

ヴァイスとミルクの協力が無ければ絶対に無理だった。

「謙虚なのはいいことね……」

そういえば不思議なのはさあ、ヴァイスさんってなんでシルバーバスターなの？

上位魔法使えるし立ち回りといいどう考えても中冷孔の又シにも普通に太刀打ちできそうじゃん。

でもどうして中冷孔の開放経験が無いの？」

そういえばそれは俺も不思議だと思う。

ヴァイスのアニキなら全然いけると思うんだけど……

ヴァイスは少しだけ躊躇いがちに切り出した。

「……中冷孔の開放の為に戦いに参戦した事はある。

実際何度も開放には立ち会った。

だが……又シの怪物と戦えることとアカウントの権利を得る事はまた別の問題だ」

ミルクは何か察したようだ。

「あー、うん……そっかあ……戦える実力があっても

開放権取れるかどうかはまた別問題だもんね……」

入ったパーティが悪いという事があるだろうし……」

そっいえば又シの怪物を倒した後も

誰がアカウントを得るかでもめる事は良く有るって言ってたな……

「ヴァイスのアニキはそういう面倒ごとに巻き込まれるくらいなら

……

権利放り投げちゃう人だろうからなあ……

でもこのパーティなら大丈夫さ、アニキもすぐゴールドバスターに

なれるって!!」

おれは自信たっぷりにそう答えた。

「そつえばパーティで思い出したけど……」

この面子のパーティー名というかギルドチーム名って決まってるなかつたわよね?」

ミルクがそんな事を言い出した。

「え?そついうの有るんだ?」

初耳だ、そんなのがあるんだ。

「俺も一時加入ばかりで決まったチームやパーティは持たなかったからな……」

「じゃあ今決めちゃいましょうよ。」

そつねえ……風神旅団とかどうかな?」

「うっん……」

まともそつだけど絶対自分の信仰で決めただるミルク……

「俺もこついう名づけを考えるのは苦手でな……」

1236……とか」

「こついう基準でその数字が出てきたのよ……」

ミルクがげんなりした顔をした。

俺にもアニキのネーミングセンスは分からん……

「じゃあさ、オープンドシールってのはどうよ?」

俺が何気なく提案してみた。

「ん?」

「ほう……」

「いや、だからさ、俺達は七つの大冷孔の封印を開くために頑張ってるんだろ?」

だから、開かれた封印を言い換えてオープンドシール。

こついうのは皆の目標にするといいいんじゃないかな、と思つたんだけど……」

「オープンドシールか……俺はそれで構わん」

「あー、なるほどねえ……」

確かに全ての善き神を信仰する人たちの共通の悲願ではあるわね……  
他の神の信者がパーティメンバー入りすることもあるだろうし……  
無理にねじ込む必要は無いか……これはこれで相応しい気もするわ  
ね。

私もそれでいいわよ」

「じゃあ、決まりだな。

俺達のパーティというかチーム名はオープンドシールで……」

とりあえず、俺達のチーム名は決まった。

このチームがこれからどうなっていくかはさっぱり分からないが……  
上手い事皆の目的が叶うように願いたい。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5764z/>

---

オープンドシール

2012年1月14日16時21分発行